零崎斬識の人間崇拝

高嶺透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零崎斬識の人間崇拝

【Ｎコード】
Ｎ８３６９Ｑ

【作者名】
高嶺透

【あらすじ】
殺し名序列第三位《零崎》の一員にして最強の殺人鬼零崎斬識がお・り・が・みに介入します

零崎ＶＳ魔人

（あーあまた殺っちまった）
深夜、零崎斬識は屍の山の上に腰かけていた。
下敷きになっている５、６人の大の男たちからは真っ赤な液体がどくどくと溢れてきており、死んでから間もないことがわかる

（ま、こんなくずたち死んだ方がましか）

「君……大丈夫？」

斬識は目の前で尻餅をついている女性に手を差し出す

「ひィ！！」

女性は悲鳴にも似た呻き声を出して走り去っていった

（あちゃちゃ、目の前で零崎しちゃったからなぁ仕方ないか）

実は今零崎斬識は零崎をする特定の条件を満たしていたので、零崎を行っていたのだ

その結果女性を助けることになったのだが

（これじゃあ助けた内には入らないよな）

女性は一般人だったようだし、当たり前っちゃ当たり前だよな

（それでも美人に嫌われるってのは傷つくよ……）

思春期は複雑なのだ！

「にゃ～殺気を辿って来てみれば……大当たりですか」

背後から異様な気配を感じ振り替える、そこには長い髪をピンク色のリボンでツインテールにした少女が、やはりピンク色のフレームのダテ眼鏡から見た感じはへらへらしているがよく見るとじっとこちらの実力をはかるように見つめているようだ

（只者じゃあ……ないな裏の人間か？）

「そんじゃあ、殺人鬼くん。いきなりで悪いけど死んでもらうよん」

超速

まさにそう表現出来そうな程のスピードでその少女は接近してきた

が所詮は超速

斬識が反応できないスピードではない。

少女は右手に持つ細身の剣で斬識の心臓に寸分の狂いなく突く

斬識はそれを愛刀の《砕牙》で受け止めた

少女はまさか受け止められるとは思っていなかったと言わんばかりの表情になり、一旦距離をとる

斬識の実力がだてではないことに気付いたのか、はじめのへらへらした表情は当の昔に消え失せていた

「にゃかにゃかやるじゃん殺人鬼くん。んじゃこれならどうよ？」

そういう性分なのか軽い口調で言葉を吐いた少女は剣を上段に構えた

凄まじい殺気を感じる

（――――来る）

「一本が……―二八本！」

通常の人間では不可能な速度で少女は細身の剣をふり下ろした

■■□□

砂塵が舞う路地のなかで少女は自分の勝利を確信した。

（にゃはは、手応えあり
殺人鬼くんも人間にしては頑張った方だけどね）

じゃあお前は人間じゃあ無いのかよと言うことなのだが、彼女は人間ではない。

彼女は魔人と呼ばれる種族の一人だ
魔人は生まれつき人間より身体能力が高く並の人間では敵わない
しかも彼女―――ヴィゼータはそのなかでも上位の魔人であり、その自負から自分の本気の一撃―――１２８撃をくらってただの殺人鬼が起き上がれるはずはないと確信していた

がその予想は外れることとなる

砂塵が落ち視界が良好になる

「あり！？」

自分が殺したはずの殺人鬼は無傷でそこに佇んでいた

その本来あり得ない光景にヴィゼータは狼狽するばかりである

「いやー君凄いな。一本の剣で１２８回もの斬撃を繰り出すなんて、驚いた。」

（手応えはあった。なのに無傷ってことは全ての斬撃を受け止めた？あの刀で？）

「じゃあ次は俺の番だ」

そういった殺人鬼は刀を中段に構える

見る限り隙はない

（殺られる前に殺る）

そう決意したヴィゼータはまたしても剣を上段に振り上げた瞬間

殺人鬼の姿が消えた

（！？）

刹那、腹部に衝撃
あまりの威力に壁に叩きつけられる

「安心していいよ、峰打ちさ。」

（ま、まさか私（上位の魔人）が捉えきれない程の速度で動いたって言うの？）

「うん、久々に面白かった。君が俺の零崎の条件を満たしているかわかんないし今日のところは見逃してあげるよ、それにそろそろ警察が来る頃だし、俺は退散させてもらおうかな」

〈またね〉ヴィゼータは薄れゆく意識のなかでそんな言葉を聞いた気がした

魔殺商会――悪の組織だ

零崎斬識――つまり此度の主人公は自宅兼事務所で新聞に目を通していた。
と言ってもただのスポーツ欄なのだが

（ぬぅ４－６かまさか馬原が崩れるとは珍しいな）

ホークスファンである

新聞を見終わり静かなのがあまり好きではない、斬識はテレビを着けた

そのなかでは、今日も《神殿協会》の司教様が映っている

場所は《神殿》の敷地内だろう
バックには白亜の建造物・・・・・彼ら曰く神殿が見てとれた

「予言者様の御神託によると残すところ六日と・・・・」

「六日後に神が・・・・・」

興奮を隠せないインタビュアーの声にカメラが空をズームする。
オーロラか、青色が滲んだような、神秘的な色が画面一杯に広がる。

ヘブンズゲート……神がくぐると言われている扉だ。現代科学では説明のつかないそれこそが一年ほど前に忽然と現れた彼らが単なる新興宗教に留まらない一端であった。

「ですがそのためにはある人物の祈りが必要なのです。現在放送させていただいているのはその人物について尋ねたいからです」

再びカメラは司教――白地に金糸の入った衣装、銀灰色の髪、色白で細面の青年を映し出す

名をフェリオールという司教は、今や女子中高生のアイドルだ

今では《ふぇりっ君》と呼ばれているらしい

神なんて下らない

斬識はテレビを消した

神様が一体どうしたって言うんだか。

人間の方がよほど素晴らしいというのに

ふと時間を見る、時刻は三時をまわっていた。

あらま依頼の時間だ

■■□□

「ふぁ～わ」

あまりに暇すぎて欠伸が漏れた

話が突然だったのでここで少し補足しておこう

斬識は自分の生活費は自分で稼いでいる

その仕事内容は所謂何でも屋だ

金さえつまれれば、殺し以外は何でもする。それが斬識の事務所《人間道》である

意外と《人間道》は巷では有名であり様々な依頼が来る。猫探しから用心棒までだ。

今回の依頼は見張り、この埠頭の中に何人たりとも入れるなとのことだ

（それにしても暇すぎるあー中にいるやつら全員零崎しちゃおうか

な）

などと物騒なことを考えているとメイド服の少女が何やらこちらに歩いてきた栗毛いろのロングヘアー、その顔は可愛いと表現できる

いやそんなことより

（めがっさ可愛い！！）

なんてことはない、斬識はメイド萌えなのだ

「あ、あのぉ」

奥ゆかしい声にさらに斬識はテンパる

「お、俺の名前は零崎斬識君は？」

出来るだけ友好的に接した効果か少女の表情はよかった普通の人だ。と言う感じの表情になった

「あ、私は吾川鈴蘭です。その――中に用事があるので通して貰え

ませんか？」

「はい！喜んで」

仕事なんてどうでも良くなった、斬識であった

■■□□

「それで鈴蘭ちゃんは何のようでここまで？もし、俺に出来ることなら何でも言ってよ」

どんっと胸を叩く斬識

「え？本当に何でもいいんですか？」

斬識は目で返事をする

「じゃあお言葉に甘えて、そのとっても高価な氷砂糖をとってこいとご主人様に言われたんですけど何のことか斬識さんはわかりますか？」

（高価な氷砂糖？何だろうか？もしかして覚醒剤かなんかのことか

な）

「あー成る程了解。それならこっちだからついてきて」

■■□□

「おぉ斬識の旦那ぁどうしたんだ？」

喋っているのは冨陸会の若頭（はじめ）齋藤一だ。

背は１８０センチ顔には十字傷いかにもという感じ。
まわりには数十人の黒服のスーツ姿の屈強な男たちがズラリと並んでいる

それを見て怖じ気づいたのか隣の鈴蘭ちゃんは俺の服を掴んでぶるぶる小動物のように震えている

（なにこれ、キュンってくる）

「いやすいません。こちらのメイドさんがねそれを欲しがっているんですよ。だから依頼は破棄ということで」

「はい？旦那よくいっている意味がわかりませんぜ」

斬識は齋藤の股間を思い切り蹴りあげた

「！？」

瞬間周りの黒服たちは懐から拳銃を取り出した

「ななにやってるんですかぁ！！」

頭を叩いてくる鈴蘭

「何って氷砂糖が欲しいんだろ？」

「やり方ってもんがあるでしょうが！！」

「いや、もうやっちまったことだし」

ひょいと近くにあったスーツケースを持つ斬識

（後はこっから逃げるだけか）

「ざ斬識の旦那、」

股間をおさえながら齋藤一は言う

「俺はあんたを気に入ってる。今ならまだ水に流してもいいぜ。」

「悪いな、おれはメイドさんの方が大事だ」

「――――そりゃあ残念だ」

瞬間無数の重火器が火を吹いた

■■□□

鈴蘭をお姫様抱っこで抱えながら斬識は走る

「逃がすなー――――殺せ――――！！！」

野太い男の声が後方から聞こえる

「そこは普通追えじゃない！？」

突っ込みの上手いメイドさんである

埠頭の入り口を出ると、そこには高級そうな車が置いてあった

「あれが私の車です」

鈴蘭が指をさした斬識は鈴蘭を抱いたまま車に乗り込む

どうやらエンジンはかけっぱなしのようなので一気にアクセルを踏む

「おうご苦労鈴蘭」

後部座席から声がした、みると銀髪に銀縁眼鏡の切れ長の目二十代前半の青年がいた。青年はにやにやしながらこちらを見ている

「ご主人様！！こここれかかか覚醒じゃいじゃないですかぁ！！！」

「君にしては中々の早さだったな。ところでそいつは誰だ？」

「話をそらすなぁぁぁ！！」

斬識は構わず、運転する

「ところで窓からバチバチ聞こえるのは銃弾か？」

「ああそうだな」

「もういやぁぁぁ！！」

■■□□

やくざと警察をまき、斬識は銀縁眼鏡の男――――伊織貴瀬の屋敷に来ていた

その屋敷は見るからに金持ちの家といった感じだ家のあちらこちらに高そうな絵画が飾られており、その他の装飾品も一流のものだった

貴瀬は何やらいたく斬識のドライビングテクニックが気に入ったら

しく応接間で歓迎していた

貴瀬と斬識はテーブルを挟み向かい合うように対面している

何やら貴瀬は話しているが、そんなことよりも彼の周りのメイドさん達が気になってならない

「そういえばまだ貴様の名を聞いてなかったな」

「……」

「おい！！」

「あ、はい何か言いました？」

「まあいい、名はなんと言う？」

何やら不機嫌みたいだ

「零崎――零崎斬識と申します」

「斬識か。ところで貴様に話があるのだがな、うちの社員にならん

か？」

「社員？」

「僕はこういう者だ」

貴瀬が差し出した名刺を見た

『伊織魔殺商会
会長兼企画兼経理兼広報兼営業
伊織貴瀬』

「まあ何だ簡単に紹介すると悪の組織だ」

あれ、もしかして頭のいたい人？

「勿論ただとは言わん。引き抜き金として二十億用意しよう」

「へ？」

「ご主人様、私の借金と同額って一体どうゆう「静かにしていろ鈴蘭」」

（何か凄まじいなこの人、普通初対面にここまでの金額を出すか？）

「あのそちらのメイドさんは借金が？」

「ん？ああ彼女には二十億もの借金があってなわけあって僕が肩代わりする代わりにメイドをさせているわけだ」

（ふーんそういうことね）

「じゃあ僕は三十億でそのメイドさんを買いましょう」

「な！？」
「はい！？」

二人は予定外の返答に驚愕する

「き、貴様正気か？この貧相な胸に三十億の価値があると「誰が貧相じゃぁぁぁ！！」グハッ」

鈴蘭パンチングが貴瀬の頬にクリーンヒットする
中々の右ストレートだ

「……結論から言おうその提案には乗れない」

「何故ですか？」

「今はいえない」

（――今は……か）

ただのメイドを雇うのに二十億ねぇ、きな臭い

「これを見てください」

斬識は自分の名刺を差し出す

『何でも屋《人間道》

２４時間どんな依頼でも引き受けます

零崎斬識』

「何だこれは？」

「自分は何でも屋を営んでいましてね、依頼という形なら引き受けてもいいでしょう」

齋藤さんからはもう仕事貰えないだろうし、新たなパイプは必要だ

ろう

にやりと伊織貴瀬は笑った

例えるなら面白いおもちゃを見つけた子供のように

勇者と言ったらガオガイガーだよね

めでたく？魔殺商会の助っ人として新たな仕事を見付けた後、夜も遅いので高瀬の屋敷に一泊することになった

案内された部屋はかなり広く、ＶＩＰ待遇であった

時刻は丑三つ時、日課のトレーニングを終えシャワーを浴びて寝ようかと思ったとき、インターホンの呼び出し音に気が付いた。

「はい」

《すぐに門のところまで来てくれ、デカイ仕事だ。くれぐれも制服を忘れるな。急げ》

言いたいことは言ったとばかりに一方的に用件だけ伝えて通話が途絶える

■■□□

ロールスロイスかうん中々いい車だな

深夜の高速道路をとびっきりのスピードで疾走する車が一台

運転しているのは斬識

助手席で固まっているのは鈴蘭
後部座席では貴瀬がご機嫌そうに笑っている

「あのいま、何きろぐらい・・・・・」

冷や汗をかきながらメーターを覗き込んだ鈴蘭はそれを見なかったことにした

「あん？たかだか２５０キロ程度だよ、気にすることはない、一般道で３００を出す本物もいる世の中だ。」

「くくくやはり貴様を雇って正解だ、二十億以上の働きはしてくれそうだな」
ふむ、貴瀬社長は自分を高く評価しているようだ

（なら、期待に答えなければ行けないだろう）

急ブレーキで車の進路を変え、インターチェンジを旋回しつつ、また加速
目の前には料金所

「斬識くん前、まーーえ――――――！！！！

アクセルを深く踏む

料金所を出るにはあり得ない速度で
抜けた

「いぃいいやあぁぁぁぁぁあ！？」

「くくくっいいぞ斬識！！それでこそ悪の組織だ！！！」

■■□□

車は霧の深い峠道を一応、常識的な速度で登っていく

「そういえば貴瀬、今回の仕事って聞いてないんだが」

「今回の仕事は正義の味方の邪魔をすることだ」

「それも闇の世界の人達なんですか？」

憔悴した声で鈴蘭は喋る

「そうだ。だからデカイ仕事だと言っただろう。魔を喰らうエキス

パート……いや、連中はもっとタチが悪いな。喰いもしない。ただ葬る、古くにはそうやって世俗を扇動した、そんな連中だ。」

「そんなのが正義の味方なのか？」

「そうとも。《勇者》だ」

車が目的地につき止まる

エンジンが止まり静寂

「「……っぷはははははは！！！」」

「痛い———！！この人痛いよおかっさ——ん！！」

「ご主人様（笑）本気で（爆）そんなこと言ってんですかぁ？」

ごつ。ごつんごつんごつんごっつん

「あだっ痛っ！？」

「きゃあきゃあ！？」

「いいか、よく聞け馬鹿給仕と雇われ侍！特に給仕の方何だったら

僕も不本意ながら貴様のその貧相な身体を二十億円分たあああああっぷりと辱しめてもいいんだぞ！？」

ごつんごつん

「痛っ」

「ごめんなさいごめんなさい、もう言いません！もう言いませんけどぉ！」

「けど何だ！？まだ口答えするか！？」

「その……勇者は神殿協会と関係が？」

荒げた息を整えシートに貴瀬は身体を沈める

「クソバカにしてはいい勘だ。奴らはまだ公にこそしてないが、恐らくフェリオールのようなマスコットとしてちまたを賑わし始めるだろう」

「なら魔王とかもいたりするのか？」（勇者がいるからって魔王とは中々俺も痛いな）

「いない」

「「……ですよねぇ」」

「だが勇者はいる、そこの展望台にな」

貴瀬の指した方には遊歩道。
すぐ脇にはオートバイが停まっていた。
それが現代の勇者の乗り物なのだろう

「それで具体的にどうすればいいんだ？」

「一発かましてやれ」

どさ、と助手席にいる鈴蘭の膝に黒い鉄塊が放られた。
コルト社製のパイソン・３５７マグナムだ

（どう考えても女性に持たせる銃じゃない）

「了解、いくぞ鈴蘭」

「でっでででできませんん！ひひっと殺しなんかかかか」

何をしぶっているのだろうか？

「馬鹿も休み休み言え。相手は勇者だその程度では死なん。もし仕留められたら二十億チャラにしてあの屋敷を譲ったあげく、僕が貴様の奴隷にでもなってやろう」

要はそれほどまでに無謀ということなのだろう

「斬識貴様は、要らないのか？」

貴瀬はもう一丁こちらに渡してくるが
おれはそれを返した

「使いなれたエモノのほうが好きでね」

腰にさした三本の刀を示す

いまだに震えている鈴蘭の手をとり展望台に向かった

■■□□

「くそっ……急がないと！夜が開けてしまう！」

少年が叫んだ、姿は霧で確認できないが、声の高低からして高校生くらいだろうと判断する

明るくなるにつれ見えてきたのだが、少年は洋風の剣を持っていた

「俺は、今日こそレベル２０になるんだっ！」

つまり今はレベル１９くらいか。冒険の前半戦が終了し少し強め、でも中ボス相手には敵わない……てな感じである

「うおおおっ！」

気合いも高らかに、シャドウ剣術を繰り返す少年

その速度は異様なものだった

「ねぇ斬識くん」

「そうだな鈴蘭」

「「バカだっバカがいる！」」

「だって一人で叫びながらチャンバラゴッコしてるもん」

鈴蘭の言い分は正しいと思う。
スピードこそ素晴らしいがやっていることはバカ過ぎる

決心がついたのか鈴蘭は銃を構え少年に照準を定めた

少年の動きが止んだ瞬間
ぱんっ！！
とかわいた音が響く
鈴蘭が恐らく人生ではじめて放ったであろう、弾丸は少年には向かわず明後日の方へ飛んでいった

鈴蘭は銃の反動を殺し切れず倒れそうになったので俺が支えた

「大丈夫か？」

「———うんありがと」

目眩が起きているのかその足はおぼつかない、発砲音による耳鳴りもそれを増長させているのだろう

「危ないっ！！」
少年の声は唐突だった

ゾクッ

背後からの殺気
敵を確認する暇はない
斬識は自らの愛刀の一つ《砕牙》を背後にいるであろう敵に振るう

背後にいたのは純白の巨人だった
そう何と言うか、ＲＰＧにでてくるゴーレムのような

バツンッ！！

斬識の一降りを喰らったそれは爆散する

「な！？」

その勇者らしい、少年は警戒心を剥き出しにする

「貴様何者だっ！？」

少年は顔が判別できる位置まで近づいてくる

（やっべバレた）

斬識が逃げるか戦うか判断に迷っていると
鈴蘭が叫んだ

「……せっ……せんぱいいいいいっ！？」

「！？お前一年の吾川か……？」

二人は知り合いのようだった

■■□□

健康的な美少年。きりっと引き締まった眉、性格を表したような真っ直ぐな鼻筋。
優しさの絶えない黒い瞳

（そうかこいつが）

（（《勇者》バカか））

直後に気付く

（いや待てよ、この状況こちらも馬鹿っぽくない？）

朝っぱらの山の中で拳銃片手にメイド服とスーツに刀三本腰に指している男

素晴らしい否スサマジイ

「あの先輩？これって……」

鈴蘭が困惑していた。

ま、知り合いがこんなことしてるなんて知ったら、自殺ものだよねぇ

それが、憧れの先輩とかだったりしたら

考えたくもない

「……ふぅ焦らないでくれよ。見てしまったから仕方ないがこれは絶対内緒だぞ？」

「は、はい……」

「そこの彼が倒したあれは《魔物（モンスター）》――ミストゴーレムっていうモンスターなんだ」

（うわぁ真顔でモンスターとか言ってんよこの人）

隣を見ると鈴蘭も同じ気持ちなのだろうなにやらげんなりとしている

勇者の少年は力強く拳を握り、厳粛な面持ちで朝日へ向かう

「そして俺は、そうした魔物から人類を守り魔王を打ち倒す使命を帯びた――――選ばれし勇者なんだ」

（ここ、笑うとこ？）

つい杉田智和の声になってしまったのはともかく
こいつが馬鹿ということはわかった

「あーあ。とうとうばらしちゃいましたね―」

咎めながらも楽しげな響きを含んだ女の声が聞こえた

（あれって確か）

見覚えがある
清楚な青の衣装に、白いライン。ナース帽を改造したような帽子には白い十字。神殿協会こシスター（？）である
なぜ（？）なのかと言うとそのシスターは腰のベルトに大柄な銃をさしていたからである

「クラリカ……」

「だめっすよ～翔希さん。こちらの不用意な発言は、こちら以上にそれを聞いた人の方に害があります。巻き込んじゃいます」

シスターもといクラリカは手にした銀の小杖を、困り顔の頬に当てる

「ま、今回は大目にしましょう
ところで翔希さん、彼女はもしかしてこれっすかぁ～？」

クラリカは小指をたてながらいやらしく聞いた

「ば、ななに言ってんだ吾川とはただの先輩後輩で、――な」

翔希は鈴蘭に同意を求め、鈴蘭はそれに曖昧に頷いた
クラリカは翔希をいじって遊んでいる
うーむ、とてもシスターには見えない

「じゃここらで本題に入りますけどお二人は一体何者っすかー？特にそっちのえーと「斬識です」斬識くんのあの一振りただ者とは思えないんすけどねぇ」

（まずっ）

「クラリカさんこそ、その格好・・・・・」

「シスターですから」

「何でピストルを？」

「シスターですから」

「あ！？ＵＦＯだ！？」

「シスターですから」

あ、この人無敵だ

クラリカは嘆息

「まあ、いいっすけどね、こうして聖なる巫女とは会えたわけですから」

■■□□

「機会が機会だから言いますけど」

と前置きするクラリカ

「鈴蘭さんあなたは聖なる巫女――――聖女様になれる資質があるんです」

勇者（笑）の次は聖女（馬）すかｗｗｗｗ

正直驚きより笑いが勝っている

「ハァ……そうですか」

「テレビ、見てないっすか？フェリオール司教が呼びかけてたんですけど」

鈴蘭はただ狼狽するばかり

「ま、鈴蘭さんは第一世界っていってもわかりませんね。表世界で暮らしている人ですから」

「いやー吾川のことは学校で噂になってたんだ。深夜のアパートにヤクザとけんそうだろ。現場に向かったパトカーは途中で、不審な高級外車に衝突されていて……」

「気づけば吾川が行方不明。フェリオール司教の呼び掛けを見計らったような事件だけに、おれは勇者として真相の究明に乗り出したんだ……けどな」

「レベルが足りなかったんすね」

「レベル？」

「お二人とも、テレビゲームやったことあるっすか？レベルが低いうちに難しいミッションとか受けるのは危ないっすよね、だから今回のミッションにはレベル２０は欲しいな、と判断したんです」

判断基準はどこからくるんだよ！！と突っ込みたいが割愛

「レベルってどうやって判断するんですか？」

「いい質問っすよ鈴蘭さん、現代は便利になってるんすよ、昔は神殿まで言って神託を受けなきゃならなかったんですけど」クラリカはポケットからポケベル（死語？）のようなものをとりだした。「マジカライズ・インジケータ。神殿協会のもつ魔導工学の結晶です。ま、早い話、強さを数値化できる機械とでも思ってください。」

怪しくクラリカの目が光る。それは宗教系のぐるぐるしたそれである

「まあこれらは全て主のなせる技っすよ！お二人ともぜひマリア教にご入信をっ！」

「あ、あのぉ「主はいるっす」」

ダメだこりゃ
翔希もかなり聞かされたのであろう、げっそりした顔で欄干にもたれかかっている。

「二人とも信じてないっすね？じゃあ翔希さんの方へ向けて」

とクラリカはマジカライズ・インジケータを手に彼へ向いたきれいな液晶画面には細々した数字のあとにＬＶ１９とひょうじされている

「へぇ」
「ほうほう」

意訳。よくわからん

「次にモードを変更して鈴蘭さんに向けると」

マイナス１

「レベル１？」

「違います。鈴蘭さんは負位置の魔力を保有しています。未確認情報ではなく、聖なる巫女として正式に認定されました」

「えっと、斬識くんはですね……あれ？」

「どうしました？」

「い、いえすいません。故障した見たいです」

その画面を見るとＥＲＲＯＲの文字が表示されていた

■■□□

「さあ鈴蘭さん、一緒に神殿へ赴き、洗礼を受けましょう！」

ヤバい。クラリカの目がものすごい勢いでぐるぐるし始めている

「で、でも私巫女って何すればいいかわかんないし」

「何言ってんすか！？全知全能全く万能なる我らが主をお呼びした暁には、聖なる魔神様も召喚するっす！魔物や悪党どもバンバン点に召させるっすよ！さあさあさあさあ神威による魂の浄化で永劫の愛と平和を！」

（うわっ。ヤバいヤバいヤバい、怖いよ）

「クラリカもうよせ。」

「何言ってんすか！？翔希さん、ここまで来て！」

「クラリカ、今は君の言うような太古じゃない！モンスターだってレベル上げに苦労するほど少ない！こんなか弱い子に世界を託す必要がどこにある！？まだ魔王は現れてないんだろ！？他に方法はあるはずだ！」

「でもこうしてる間にも魔王の勢力は力を蓄えてるっす！一刻でも早く主をお呼びしないことには、世界は破滅への一方っすよ」

（へーえそっすかぁ……夜逃げの準備しとこうかぁ）

「世界の数十億人もの幸せがかかってるっすよ！」

パンっと乾いた音がする。驚いた斬識が振り向くと、翔希がクラリカの頬を叩いた音だった。

「翔希さん……？」

「すまないでもたった一人でも、誰かが犠牲になるやり方は、好きにはなれない」

「くくっそうか」

貴瀬の声は突然だった

■■□□

欄干のそと

繁みから飛び上がってきた、貴瀬は鈴蘭と俺の間に着地する

瞬間、翔希が剣を構えた

「久しぶりだなクソガキ。レベルは上がったか？んん～？」

「黙れっなぜそれを知っている！？」

貴瀬は鈴蘭のカフスの止め具を外し自分の耳にはめた補聴器を取り外す

（盗聴してたんかい）

「よくやった二人とも。レベル上げは阻止できたようだな」

「え、はいご主人様」

「うす、社長」

「ご主人様？社長？」

「二人とも我が社の社員だ。つまりお前ら側の人間ではなくこちら側の人間だ」

（うわっ、嫌な言い方だなぁ）

「伊織っ！貴っ様ぁ――――！！」

「斬識」

翔希が怒り狂ってるのをよそに貴瀬は声を潜める

「いま厄介なのは、クソガキではなくあのシスターだ。協会はともかく異端審問会が出張ってきてたとは計算外だ。」

「異端？」

「そうだしかも第二部の超一流の殺し屋だ」

（あれが？）

「翔希さん、あの人いったい何者すか？」

「伊織魔殺商会悪の組織のボスだ」

「へぇなら悪人すね」

一瞬だった。拳銃を引き抜きその木製のホルスターと組み合わせてライフルのように肩に構える

「天に召しませ」

パンっ！！

キィィン！！！

撃つ動作が一瞬ならそれを防ぐ速さも一瞬だった、クラリカが構えた瞬間斬識は《砕牙》を抜き銃弾を弾く

「へぇ、やっぱりただ者じゃないみたいすねぇ」

「シスターのくせに知らねぇのか？汝殺すことなかれだぜ？」

クラリカは獰猛に笑い再び構える

「甘いっすよ、その言葉には続きがあるんです、汝、殺すことなかれ・・・・・でも悪いやつは殺ってもオッケェ！！」

「なわけあるかボケッ」

言い終わると同時に貴瀬鈴蘭斬識は走る

「やめろクラリカ」

見かねた翔希がクラリカの銃を投げ捨てる

それをチャンスとばかりに貴瀬は叫ぶ

「バカが。やっていろ」

小悪党にお似合いな見事すぎる捨て台詞をはいていた

だがしかし、こちらに気づいた翔希は桁外れの跳躍力で俺たちの頭上を飛び越え一本道の階段の前に躍り出た。

「くっ！？」

呻きのけぞる貴瀬

「社長走れ」

言うや否や斬識は貴瀬の前に躍り出て翔希の剣を下段からの剣撃でへし折った

「な！？」

「ふん！いい仕事をするじゃないか」

「早く車に乗れ！！」

■■□□

「いいぉぉりたかあぁぁぁせぇぇ！！」

「あ。追ってきましたよ？ご主人様」

斬識はミラーを使って後方を確認する

ノーヘル、鉢巻き、後ろにシスターの二人組

片手には予備だろうか？折れてない剣を持っていた

嫌な暴走族だった

「斬識、急いで撒かなければ、この車のアルミボディ簡単に真っ二つにされるぞ」

（この社長、やっぱり楽しんでやがる）

だがしかし、そういわれてもあちらも小回りのきく単車の優位性を上手く使っており中々まけない

どうする

「……社長、この車少し傷つけてもいいか？」

貴瀬はにやりと笑い

「許可する！！」

「よっしゃああ」

斬識はハンドルを思い切り、右に切る岩肌が剥き出しになっているところに激突する

「なにしてんだぁ！？斬識ぃぃぃ」

鈴蘭……とうとう呼び捨てになったか

岩肌にぶつかりそのまま壁に乗り上げ、岩肌を車は登り切った

どんな感じか簡単に言うとルパン三世劇場番を想像してもらえればわかりやすいだろう

あの巨大トラックから逃げるとこだ

「くくくっ中々いいものを見せてもらった」

「もぅいやだグスッ」

貴瀬は笑い
鈴蘭は泣いていた

貴瀬邸にて説明会

「逃げられちゃいましたね」

クラリカは平坦に言った

「くっそぉ！！」

翔希は怒りからガンっと壁を蹴る

砕け散る岩を見ると、かなりの威力である

「これからどうしましょうねぇ。鈴蘭さんは、どうやら向こうに協力してるっぽいですよ」

「違うあの子は伊織かあの斬識とか言うやつに踊らされているだけだ」

チクショウ！と言いながらまた翔希は岩肌に八つ当たりを続ける

「斬識っすか、少し調べてみましょうか。翔希さんを遥かに上回る剣の使い手。あんなに早い剣筋はみたことないっすよ」

「……頼む」

翔希が悔しさに拳を握りしめると、気の抜ける電子音が静寂を打ち破った

「あーちょっとすいません、電話っす」

ったくもっと真面目なシスターはいなかったのか

翔希に以前はシスターなどついていなかった。神の降臨間近にして大神殿から急に彼女が派遣されてきたのである。
実力が並のシスターとは比べ物にならないことを共にいてすぐに理解したが、彼女がどこで銃の扱いなどを覚えたのかは聞かされていなかった

「はぁはぁそぅなんすよ」

髪をくるくるしながら生返事を返すクラリカ

その様子を翔希は十六茶を片手に眺めていた

「そりゃ超オッケェすよ司教様」

十六茶を口に含んでいた翔希はそれを吹き出す。彼女がケラケラと笑いながら話している相手が司教という事実に
神殿協会は《預言者》を頂点として、四名の枢機卿、十六名の司教、八十二名の司祭というピラミッド型の人事を敷いているが、司教ともなれば、裏では国会元首にも通じるほどの権力と聞く

「そういうわけっす翔希さん」

いつの間にか会話を終えていたクラリカは満面の笑みでこちらを見る

「どういうわけだよ？」

「実は枢機卿のうちお一人が、主の降臨に立ち会うため日本にやって来たっすよ。でまぁあれっす。聖戦てやつですか？」

ニヤリとクラリカは邪悪に笑った

「東京に駐留しているフェリオール司教旗下、第十一聖騎士団を持って、聖なる巫女を悪のそしきから奪還するっすよ」

□□■■

「マジカライズ・インジケータが示したよう、鈴蘭君は聖女になる可能性を秘めている」

ここは貴瀬邸のとある一室

まるで教室のような内装の部屋の中で二つの机にセーラー服姿の鈴蘭（メイド服は洗濯中）と斬識が座らされていた

貴瀬は黒板の前に立ちまるで講義のような形となっていた

「あの社長」

斬識が手を挙げる

「なんだ」

話しの腰を折られたのが気に入らなかったのだろう、不服そうに言葉を返した

「聖女って何？」

貴瀬はため息をつきこれだからゆとりは……と呟く
カチンときたがここで怒ると話が変な方向に向かいそうなので自重する

「聖女ーーー文字通り聖なる巫女だ。
簡潔に説明させてもらうとだな、やつらの言う神を、地上に呼ぶためには聖女が必要なのだ。故にやつら神殿協会は鈴蘭を血眼になって探しているのだ」

「あのご主人様、何で神様を降臨？させるのを妨害してるんですか？良いことではないんですか？」

確かに神様が登場するのなら少なからず害という害があるようには考えられないが
いや、でも一応ここは悪の組織なわけだしそういうわけにもいかないのかな？

「うむ、今それについて説明してやる」

□□■■
カッカッ

室内にチョークが黒板を引っ掻く音が響く

そこには湖畔にたつ樹木や泳ぐ魚がかかれていた

「これはマティ＝ガティのマトリクスと呼ばれる社会モデルだ」

「マ・・・・ティ？」「あ・・・・・・ぇ？まてぃが？」

やはりまた貴瀬は嘆息しこれがゆとりかとまた呟いた

我慢我慢

「いいか。十九世紀末のアメリカの社会学者、マーティ・ジェファーソンと並びにガルチラ・ガーランドが提唱した社会の仕組みというものだ。王、王族、騎士、農夫・・・・・といった中世の階級社会はことごとく、この閉鎖された湖の中で表すことができる。といった旨のものだが、解釈を変えると、そのまま世界の仕組みを表すことができる」

貴瀬は湖面に当たる部分をチョークでなぞる

「これが表層、つまり表の世界。一般人の住む領域だ。ちょっとしたさざ波がたつこともあるが、基本的によく日が当たる平穏な世界だ。協会の言う俗世、第一世界と呼ばれている」

チョークは一つ下へ

「ここが対流。以前も言ったが暗殺者、スパイ、ギャングなどがいる。裏の世界だ。おそらく斬識がいたのはここだろう、若干深い浅いはあるだろうがな。静かながらも寒暖の差で流れがおき、表層を巻き込むことも、表層から何かが落ちてくることもある。しかし、

薄暗いが表層から覗けないわけではない」
なんとなくわかる気がする
スパイ映画やドキュメンタリー番組があるし
強盗やテロに一般人が巻き込まれることもある
多分そういうことだろう
鈴蘭と斬識は頷く
そこに近い部分でチョークが鳴る

「深層。我々がいる闇の世界。もう光も届かん。表層からは見ることも感じることもできん。」
最後に伊織は湖底をこつりとチョークで叩いた

「そして澱」

「「おり？」」

「長くかかって三つの層から沈殿してきた塵や埃。とても静かで今ではあるかないかもわからない堆積物」
こつ、こつ、となにやら退屈するようにそれを叩いていた伊織。言うか言うまいか悩んでいるように見える

「これが世界の仕組み。世界のバランスだな。協会はこれを崩そうとしている。そして崩すためのきっかけ……聖なる魔神を呼ぶためのきっかけが君だ」

鈴蘭は目を泳がせ

「……へ、へぇ～すごいね～斬識くん。そんな大層な力持ってたんだね」

「おーい、現実逃避は止めろよ。聖女様」

鈴蘭はおろおろしながらも聞いた

「……神様が降りると平和じゃなくなるんですか？」

「光が強まれば影は濃くなる。澱。大雑把に言えば魔物が溢れ返る。詳しい理由は知らんが、バランスとしてみれば妥当な話だ。それをやつらは知らん。だが、万一そうなってしまえば悪の組織として、それ以上に悪い魔物が闊歩し始めたら商売にならん」

貴瀬は深刻な溜息を吐いた

「世の中は複雑でな。神が降りてきて平和すぎても、悪の組織以上に悪い魔物が現れても商売は上がったりなのだ」

「まあ、神が降りたあとにも今の生活を保障してくれるなら、今ここでバカメイドを裸にひん剥いてリボンをつけて協会にでも届けてやるんだがなぁ」

「なっ！？なんで裸ですかっ！？ちょっ斬識くんこの眼鏡輪切りにしちゃってよ」

リボンに包まれた裸身の鈴蘭か……

「おぼぉぉろぅぅぅう！！」
斬識の口内から吐瀉物が出てきた
「いやぁぁああ！」
一部が鈴蘭に飛沫した
鈴蘭は１５のダメージを受けた
「馬鹿者！僕の屋敷で吐くな！」
貴瀬は精神的苦痛を負った！
マジックポイントが２０減った
「・・・・・恐ろしい物を想像しちまったぜ」
「猫耳をつけてみたらどうだ？」
「お〝ぼろおぉぉおぅぅぅぅう！！」
昼に食べたラーメンが逆流してきた
トンコツの味がした
斬識はトラウマを負った
「・・・・・すまない」
貴瀬は頭を下げた

この男が頭を下げる日がくるとは

「何ですかぁ二人とも！こんな美女の体を勝手に想像しておいてその反応は！！」

「「ふっ」」

「鼻で笑うなぁ！！」

「だって」「なあ」

斬識と貴瀬は通じあった

その姿を見て頭に血がのぼったのかはたまた女のプライドか、すっと立ち上がった鈴蘭はセーラー服をはだけさせしなをつくり

「うっふん」

「「おぼぉぉろぅうえぇえええ！！」」

「死んでしまえぇぇえええ！！」

鈴蘭の右拳は二人を深々と貫いた

貴瀬邸にて説明会（後書き）

この小説を書くに辺りかなり迷走中です不定期更新となりますがどうぞよろしくお願いします

貴瀬家の人々（前書き）

久々の投下です

貴瀬家の人々

現在明くる日の朝零崎斬識は貴瀬邸を歩き回っていた
理由は至極簡単やることがないのだ
確かに俺は貴瀬に雇われてはいるがそれはあくまでも用心棒的な立場でということ
貴瀬に不利益をもたらすものがいればそれが誰であろうと潰すし相手をする。だがそれ以外はしない。
まあ、それ（戦闘）以外はからっきしだからなんてわけでもあるんだけど・・・・・

そして今朝のトレーニングは既に終えているしなすべきこともない。
俗に言う暇人だ。フリーヒューマンなのだ。

そうして歩き回ること数分ふと庭を見ると人がいた
少女だった
年は１６、７と言ったところか。癖っ毛が特徴で目が悪いのか右目を頭の後ろからばんだなを巻いて隠していた
そしてやはりこの屋敷の住人なのだろう、鈴蘭が着ているものと全く同じメイド服を着ていた

メイドを発見したのだ
メイドが現れたのだ
世紀末のこの荒廃した地に女神、否！創成神とも言えよう存在が俺の目の前に現存していたのだ
ころを抱きつかずにいられるだろうか？いや、ない

よしっ抱きつこう

あんなにかわいいメイドさんを目の前にして抱きつかないなんて、
これはもう失礼を通り越して侮辱だね

メイドを見たらまず抱きつく、これ男の性ね

幸福中の幸い、まだむこうはこちらに気付いていない

「……ふぅ」
軽く息を吐く
これから自らが起こすであろう事象を完璧に遂行させるために全身の筋肉を和らげかつ最大限活用できる状態にまで昇華させる

零崎斬識覚悟を決めろ
今まで何度も何度もシミュレーションしてきただろう？己を信じろ
自己を確立させろ自らを奮い立たせろ
いつだって自分を律してきた
一日だって鍛練を欠かしたことはない
成すべきことをするために俺は生まれてきた
今がその時決戦の時なのだ
出し惜しみはするな
全力で全開を出しきれ
大丈夫
俺なら出来る
否！
やらねばならないのだ！
斬識は腹を決め全神経を足に集中させ飛び出した

ルパンダイブ（斬識命名）で片目の少女に向かい跳んだ
無垢な少女に飛びかかる変態の図がそこにあった

とゆうか俺だった

信じたくはないがそれが現実なのだ
受け入れなければ
自分ももうすぐ大人にならなければならないのだから
将来後悔するだろう若さゆえの過ちを

そして、メイドの肩を掴もうとした
刹那

消えた
メイドの姿が視界から消えた
それはプロのプレイヤーであり『殺し名』序列第三位にして一賊最強とも謳われた零崎斬識でさえ影をわずかに捉えることしかできない

「えっ？」

斬識はただただ呆けることしか出来なかった
完全に油断

ただのメイドと侮ったのが彼の失敗

彼女はここにいる以上、この会社の社員

ここは悪の組織

□□■■

ゾクッ

右後ろから強烈な殺気

今まで相対してきたもの達の中でも指折りの圧倒的殺気

「クッ」

斬識は空中で近くにあった木を蹴り強引に体勢を変える

瞬間斬撃

鞘から抜いた砕牙でメイドが腰から抜いていた刀を弾く

ニ撃三撃四撃と次々と技をメイドが繰り出してくる

無表情でかつ最適に最速で躊躇の無い確実に獲物を仕留めるだけの

斬撃をいくつもいくつも

防戦一方

裏の世界でも随一の剣の腕を持つ斬識でさえもギリギリである

だが斬識はそんな命の危機の中おおよそこの場に似つかわしからぬ

ことを考えていた

（ーーー素晴らしい）

みとれていた

少女の人間の限界を当に上回っているその剣技にみとれていた

しかし、攻撃されている以上いつまでもこのままでは殺られてしまう

覚悟を決めその腰に差したもう二振りのうち一振りを抜こうとした

その時

「止めろ軍曹！！」

■■□□

怒号のおかげか少女の動きはピタリと止まった

同時に斬識も止まる斬識は喉元に少女は心の臓にその気になればいつでもお互いを地に沈められる位置で睨み合うかっこうだ

「貴様らこれはいったいなんの真似だ」

少女を止めた声の主ーーー伊織貴瀬は言う

「……」

少女は答えない

少女は刀を静かに鞘に戻すとどこかへ歩いていった

「……ったくどうしてこう僕は社員に恵まれないんだ」

うんざりしたように貴瀬は言う

「社長」

「なんだ？」

「あの子の名前は？」

「そんなことを聞いてどうする？」

「どうもしないさ」

「決着をつけるなんて馬鹿なことは言うんじゃないぞ」

いやいや、あんな強い人にもっかい挑むなんて面倒くさい

「……沙穂だ」

沙穂

「軍曹と呼んでいたのは」

見た目は若そうに見えたが実は意外とお歳とかそんな落ちかな？

「ん？まあそんなことはどうでもいいではないか」

「はぐらかすのは止めてください」

「止めるのは貴様だ」

「答えられないんですか？」

「では、君が鈴蘭に素性を聞かれたら包み隠さず全てを教えられるのか？」

「……俺は後ろめたいことなんてしたことありませんよ」

貴瀬はククッと笑い

「面白いことを言うな。君は。
実はな、先まで少し調べものをしてたんだ《殺し名》というものについてだが」
「人には聞くなと言って自分は聞くわけか。
嫌な奴だ」
貴瀬は嘲笑し
「何を言っている。ここは悪の組織だぞ？
それで当然なのだ」
貴瀬はそれにと続け
「調べるなとは言っていない」
それは多分いくら調べても知られない自信があるということなのだろうか
今度《大将》にでも調べてもらおう
あの人なら大抵の情報は手に入るだろう
いずれにしろ今ここで彼女のことは知ることは出来ない
「それで俺はクビなのか？」
「何故貴様をクビにする必要がある？」
「はっ、とぼけんなよ。もう《零崎》について調べはついてるんだろ？気なんてつかうなよ。殺人鬼相手に」

人間が鬼に気を使う必要なんてどこにもないのだから
元々鬼が人といるほうがおかしいのだから
「お前はわが社に必要な人材だ。ふざけたことを抜かすな」
「……」
そういえば、久しく聞いてなかったな
「なんとか言ったらどうだ」
「ああ、いやすまない。そんなことを言われたのは久しぶりなもんでな。」
必要だなんて
殺人鬼には必要のない言葉だったから

□□■■

「はい、ではこれから新入社員の自己紹介を始めます」
と事務的な口調で言ったのは見るからに高そうなスーツを身に纏った伊織貴瀬
「まあ、早い話が顔合わせと言うことだ。全く知らない者達と仕事をいきなりしろというのも酷だからな」
昨日入った、学校の教室風の部屋である
「彼が先日新しく我々の仲間となった零崎斬識君です。はい、挨拶してー」

「零崎斬識です。先輩方に遅れをとらないよう、誠心誠意頑張る所存です」

愛想よく笑顔を振り撒く斬識を見ているのは三人
一人は青みがかかったような黒髪をした、年の頃5歳くらいの小さな女の子
もう一人は鈴蘭と同じメイド姿、腰までもある長い黒髪をリボンで束ねた、美しい女性である
だが“いつものように”不思議とかわいい！とか抱きつきたい！とかそんな感情は沸き上がらなかった
なんというか、格が違う気がするというか自分でも何を言っているのかわからないが、ともかく本能がそれをするなと告げていた

三人目は鈴蘭だ

「なんか私の扱い酷くない！？」

叫んだのは鈴蘭

「君はいったい何を言っている？」

貴瀬は危ない人を見る目だ

「あ、すみません。なんだか……失礼なことを言われた気がして」

貴瀬はそんな鈴蘭を無視して他の社員の紹介に入る
青みがかかったような黒髪をした少女を指を指し

「あーこの子はリップルラップルだ」

突如少女は貴瀬の前まででてくてくと歩きだしいったいどこから取り出したのかミズノ製の金属バットで

がこん！！

と貴瀬の頭を殴打した

「なっ、何をするっ！」

「リップルラップル様なの」

「は？」

がこん！

「は、じゃないのリップルラップル様なの。私は生粋の女王、リップル・ダイアナ・ラップル妃なの」

どこかの王待子妃のような名前だった

「私はみーこと言います。これからはよろしくね」

そんなリップルラップルを尻目にメイドの女性が喋る

「はい！こちらこそよろしくお願いします」

惜しみもない営業スマイルで斬識はそれに答えた

「けっ」

唾をはいたのは鈴蘭
猫かぶってんじゃねぇよと聞こえてきそうな感じ
「どうしましたか？鈴蘭“先輩”」
先輩
センパイ
せんぱい
鈴蘭の胸のなかでこの単語だけがこだまする
「ん？何でもないよ。えへへ」
ちょろいやつだ
「し、紹介は終わったか？」
頭から血を流しながら貴瀬は立ち上がる
「これくらいにしておくとするの」
リップルラップルはミズノについた返り血をハンカチで拭きながら言う
（社員にボコられる社長って……）
とりあえずリップルラップルに逆らうのは止めよう
「他には沙穂……さっきの子と、ドクターがいるのだが、今は手が空いてなくてな。あと全身タイ……ああ、あいつらはストライキ中だったか」

「……全身……なんと？」

「全身タイツどもだ。まあなんだ、戦闘員というやつだ。悪の組織にはつきものだろう？」

ああ、ショ〇カーね。

「だが、あいつらは今とある理由でストライキ中でな、今夜の戦いでは使えそうもない」

「そうか、ストライキじゃあしょうが……今夜の戦い……？」

戦い？今夜？なにそれ？

「ああ、いい忘れてたがな、今夜この屋敷を神殿協会が襲撃するぞ」

貴瀬家の人々（後書き）

しばらく家庭の事情でかなり更新が遅れると思いますが、頑張って書き続けたいと思ってます

見限らずに暖かい目で見守ってもらえれば幸いです

よろしくお願いします

悪の組織対神殿協会

不可視にして、無音
ただ叩きつけるような豪風だけが吹き荒れていた
監視衛生さえ誤魔化してしまう神殿協会の結界内
神殿の上空にて、その透過結界が解かれる
ライトアップされた協会の上空に現れたのは、２ローターのヘリコプター四機

川崎ボーイングＣＨ４７。自衛隊や米軍ではチヌークの愛称で呼ばれている。機首に描かれた天使のノーズアートと、群青色に白い十字を抜かれたその塗装は神殿協会の自前であることを示している
どどどどどどどどどっーーー！不可聴結界が溶け突如叩きつけられた爆音に、翔希は思わず耳を押さえた。
「すごいな・・・・・」
単純に、目の前の機体に圧倒されたこともあるがそれ以上に自分が属する協会の組織力に、今さらにして舌を巻く思いだった
彼らが本気になれば国家とさえ一戦を交えられるだろう

「わあああっ！ヘリコプターっすぅ！！」

ヘリからの風に、僧帽を押さえたクラリカが笑顔で駆け回っているのはさておき
銀髪をなびかせ、フェリオールが聞いてくる

「この四機と、第十一聖騎士団があなたの指揮下となります」
「ええ・・・・・大丈夫です」

翔希とフェリオールの前には二百人近い聖騎士が整然とならび、命

令を待ち焦がれている

「吾川（鈴蘭の旧名）は必ず助け出して見せます」

「フェリオール・アズハ・シュレズフェルの名において我が第十一聖騎士団に命じます。第十一聖騎士団はこれより勇者、長谷部翔希の指揮下に入り聖女名護屋河鈴蘭を悪の組織から奪還しなさい」

□□■■

第十一聖騎士団が出撃する少し前に遡る

連れてこられたのは館の最上階・・・・・四回にある貴瀬の部屋だった

窓際、木製の大机には革張りの椅子。貴瀬はそこに腰を降ろしている

「さて今回の仕事だがお使いにいってもらう」

貴瀬は机の書類を脇へとどかし代わりにリュックサックと何やら鉄？のような鉱物、Ａ４サイズの紙を机に載せた

「これは・・・・・この屋敷の地図か？」

「ああその通りだ」

何やら地図には赤いマーカーで印が塗られていた

ここに行けばよいのだろうか

「なに、この屋敷の中だ。その場所にこの魔導力結晶を届けてほしい」

「魔導力結晶？」

はて聞いたこともないが

「君が知る必要はない。どうせ知っても使えはしない。その印の場所にはドクター・・・・・白衣を着たあやしい男がいるはずだ。その男にそれを渡してくれたら君の仕事の終わりだ」

貴瀬は続けて

「わかったら行ってくれ。僕は昨夜から徹夜でな、書類の作成に忙しい。だというのにあの女は・・・・・」

貴瀬はみーこが描かれている絵を見やり、イラつくように乱れ気味の髪をかき上げる

「了解。んじゃ行ってきます」貴瀬も意外と苦労人のようだ

□□■■

地図は屋敷全体を断層にして表されたものだった。地上は一階から四階。それから庭、中庭、裏庭。地下。詳しく邸内を案内されたことはなかったのでこれは便利だった

ついたのは渡り廊下を進んだ離れの棟だ。

最奥の扉をくぐると、その部屋は手術室の様相を呈していた

無影灯、モニター、そしてよく使用用途のわからない種々の機械と・・・・・革ベルトで四肢をベッドに固定された鈴蘭がいた

（……うわぁ）

すでに回れ右を行いたい斬識だったがそれを何とかこらえた

「あ！斬識くん。ナイスタイミング！お願い、わたS「嫌だ」って、まだ何も言ってないよ！」

いやいや、こんな変態趣味に付き合ってられんわ。お医者さん放置プレイ？

「いひっ……いひひっ」

不気味な笑い声が聞こえて奥を見ると危ない青年が一人
薄汚い白衣、ただ伸びただけのような長髪、片側だけに分厚いレンズがはまった黒縁眼鏡。そんな痩身の陰鬱な男が、唇をひくつかせていた

『白衣を着たあやしい男がいるはずだ』

思い出すのは貴瀬の言葉

（あ、この人だ）

どの部分で確信したかはさておき（わかりきっている）
この際鈴蘭が縛られていることもさておきというより見なかったことにして

「えっと……あなたがドクターですか？」

呼ぶと男はすぐに答えた

「いひっ、いひひっ、き君はだ、だ、だ誰だい？僕の楽しみをじ、邪魔するつもりかい！？」

ぎゅうぅいいい

ドクターの手にあるドリル（何に使うんだ？）が激しく回転し始める

「いいいぃやあぁぁああ！ざ斬識くん早く助けてぇえええ！」

泣いて懇願する鈴蘭

対して斬識は状況を上手く把握することができない

とりあえず喋ることは出来るようなので会話を試みよう

「俺は、新入社員の零崎斬識」

「いひっ、君が噂の斬識くんかいぃ！？う、噂は聞かせてもらってるよう。」

斬識は手早く袋ごと貴瀬に頼まれていたものをドクターに差し出した

「いひひひっ！ご苦労だったねぇ！これで、か、完成するよう！超電磁鈴蘭砲がぁ！！」

「おい、こらぁ！なんだその不吉な名前はぁ！斬識くん、手遅れになる前にそこの池沼を何とかしてぇ！」

ああ、面倒臭いけどしょうがない助けてやｒ「ああ、そう言えば貴瀬が僕の邪魔をしなければ、君専属のメイドを雇うとかなんとか」

僕は今何も見なかった
さっと身を翻し外へ出る
「ちょっ待てえぇぇええ斬識ぃいいい！！」
□□■■
眼下に星空がさんざめいている
街の明かりだ
人類の繁栄の象徴
闇に怯え、恐れ、それに克った人間たちが灯した火は天上瞬く星の海にも負けぬほど美しい
そして、その狭間に轟音を掻き立てながら、雲を切り裂き、移動する鋼鉄の猪、輸送ヘリの中に翔希はいた
『降下地点まで5分を切ります！出撃準備願います！』
操縦室からのアナウンスに重厚な足音が答えた
重鎧を着た神の使徒たちが今か今かと待機している
その鋼鉄の鎧はライフル弾すらも貫通することが叶わず、純白のマントは一千度のバーナーでも焦がすことは不可能
しかして腰に提がった長剣は岩をも貫く
左肩の不自然に巨大な肩当てには聖騎士団の剣十字、そして？？のマーキング
光と神の名の下、生命を奪うことに躊躇いのない彼ら
聖騎士達は緞帳のような純白のマントを引きずり、降下ハッチに向

かい整列していく
生気など感じられぬほどの、機械的な統率に翔希は気圧された
しかし、首を振り鉢金を締め直す

《残り三分！》

ハッチが開き始める。高空の冷気が機内に吹き込んでくる

「よし、ではこれから……」

立ち上がり翔希が声高に叫んだ矢先だった
ハッチの横にたったクラリカが、長いスカートと髪とを大きくはためかせながら拳をつきあげる

「いいか貴様らーっ！貴様らは聖戦の犬だーっ！貴様らが受けてきたくそみてぇな訓練は全てこの日のためにやってきたと思えーっ！この世のあらゆる悪党どもを殺して殺して殺しまくって殺されちまえーっ！貴様らの魂はすべからく神威に浄化され主の御許に飛んでいくのだーっ！」

「「「おおおっ！！」」」

騎士団が野太い咆哮で呼応する

「おい、クラ……」

「びびるんじゃねえぞーっ！作戦に失敗するようなインポ野郎は自傷行為とみなして置いていくっ！ねぎらいの冷えたビールも、私みたいな可愛いシスターからのご褒美も一生無しだーっ！」

《五、四、三……降下地点です！》

「よおおおっしゃあああっ！！行っけぇ野郎どもぉっ！！」

弾けるような笑顔でクラリカが夜空を指差す

騎士たちが連弾となって飛び出し、月光を受けるパラシュートの華を夜空へと咲かせていく。

「ゴーッ！！ゴーッ！！ゴーッ！！」

ぐるぐる腕を回して叫ぶクラリカは翔希の視線に気づき言った

「いやー、一回やってみたかったすよ。海兵隊ごっこ」

もう少し

ホントにもう少しだけでいいから真面目なシスターはいないのだろうか

「いや……いいけどさ」

「んじゃ、あたしも行くっすよ！下で会いましょう翔希さん！」

ぴゅんとクラリカは夜空へと呑み込まれていく

翔希もまた、嘆息を決意の気合いに変えてダイブした

□□■■

「ふん。バカどもが大量に降ってきたな」

明かりを落とした教室で、貴瀬は双眼鏡を覗いている

窓際に張り付いた鈴蘭、斬識も森に降り注ぐ白い群れを見た

「情報によると搭乗した聖騎士は約ニ百。陣頭指揮は勇者にして世紀のクソガキ長谷部翔希一匹。他、異端審問会第二部のイカれ、クラリカが一匹だ」

教卓に戻った貴瀬は照明を戻す
緊張の面持ちで机に座る鈴蘭
貴瀬の隣で不安そうに闇夜を見詰めるみーこ
警戒する目付きで斬識を見る沙穂
それを無視して刀の手入れをしている斬識
何故かその膝に座りミカンを剥いているリップルラップル

「貴様らやる気はあるのか」

反応したのはふるふると首を振ったリップルラップル

「有田ミカンなの」

一房貴瀬に見せびらかし自分で食べて頷く

「おいしいの」

「どうしてわが社はこう・・・・・！人材に恵まれないのだ！」

「でもたぁくん、社員てたぁくんだけでしょ。この中の誰も、お給料は貰ってないし、斬識くんは一時的に依頼して雇ってるだけだもの」

その事実に斬識は特別驚きはしなかった
後で聞いたことだがみーこはそもそも人間ではないらしいし沙穂は

仕事をするようには見えないし、リップルラップルに至っては就職できる年齢ではない
「まあ、大船に乗った気持ちでいるの。タイタニック号は無敵の艦隊なの」
タイタニック号は艦隊ではない。しかも、最後に沈むのはともかくどこからそんな自信が出てくるのだろうか
豪胆なリップルラップルは未だミカンを食べつつ胸を張っている
「……ふん。まあいい。それでは事前に話した通り持ち場に着け」
リップルラップルはミカンを頬張り退出
みーこは未だ斬識を警戒する沙穂を促し連れ添い退出
斬識もそれに続き持ち場につくことにした

□□■■

貴瀬から受け取ったスリムなインカムを装着し持ち場に着いた
場所は玄関から少し左にそれた渡り廊下
貴瀬の読みではここを聖騎士の内約四分の一が通るとのことだ
社長の命令は一人も通すなとのこと
無茶な内容だよほんと
「ま、無理ではないけどさ」
生ぬるい風を感じながら呟いてみた

月が笑うような夜こうして一人でのんびりするのもいいもんだ
斬識がそうやって黄昏ているとガチャガチャガチャガチャと、風情のへったくれもない鎧同士がぶつかる、金属音が聞こえてくる
聖騎士だ
その重厚な装備を物ともしない凄まじい速度でこちらに迫る
その数ざっと１５、６

《斬識、一人もそこを通すな。殺す以外は好きにしろ》
別れたときと同じ内容の命令がインカムから聞こえた
「喰らえ神威の剣をっ！！」

□□■■

聖騎士が剣を上段から振りかぶる
主の加護の下悪を滅するため一切の躊躇を捨てた必殺の剣
そしてそれおろそうとした
「遅い」
突如目の前の青年は消えた
青年はどこに消えたのか、それを音が教えてくれた
バギャリ

瞬間膝に激痛
後方から何者かが――――否、先の青年が鎧の隙間、間接部に刀を振るった
「あっぎゃあああ！！」
先頭だった聖騎士は痛みに悶え、膝から地面に倒れる
その光景に後続の聖騎士たちはただ息を呑むばかり
だがそれも一瞬
「ひ、怯むなー――ッ！！我らには主の加護がある！！恐れずに進めーーッ！」
後方で怯えていた聖騎士が声を張り上げる
皆を鼓舞するその声は震えていた

□□■■

監視室と呼ばれる部屋
明かりはなく、壁面にずらりと並んだモニター群が照明の代わりだ
そして、その部屋にいる二人はその中の一つに目を奪われていた
「……すごい」
言葉を漏らしたのは鈴蘭
「ああ、全く動きが見えなかった」

二人が見ていたのは斬識の戦闘――――というより一方的な虐殺（殺してない）

その動きはいつもメイドさん萌えーーーッ！！といきなり叫ぶような人物と到底イコールで結ぶことが出来ない

「ここは任せてよさそうだな」

呟いた貴瀬は他の画面を確認していくのだった

□□■■

玄関近くに掘られた深いとてつもなく深い穴に聖騎士たちはいた

「クソッ！こんな落とし穴にはまるとは一生の不覚！」

「よいしょ……ロジャー団長。あまり無駄口は叩かずに急いでよいしょ登りましょう」

「……わかっている」

現在、人間ピラミッドなるものを作り聖騎士たちは穴からの脱出を試みていた

最下段のものたちの体力も気がかりだ。急がねば

騎士団長は数えるのもめんどくさいピラミッドの最後の一段、小隊

長の肩に足をかけ地上へ手を伸ばした

団長が懸垂の要領で穴から顔を出すと……ブンッブンッと金属バットでスイングしているまだ5、6歳のかわいらしい少女がいた

団長に気付いた少女は団長の目の前までてくてくと歩いてきた

「何だ……君は？そこをどきなさい」

「……なの」

ん？今なんて

「涙の数だけ人は強くなるの」

そういってバットを構える少女

「ランディ・ジョンソンなの」

「ランディ・ジョンソンは投手……！」

すぱがぁっ！！

うわぁぁぁ

ぎゃあぁぁ

悲鳴とともに崩れ落ち折り重なる鎧の騒音

「……快感なの……」

少女は無表情で穴を覗きこむ

どこか楽しげに

□□■■

ちん

刀を鞘に納める

「あー疲れた」

佇む斬識の足元には大柄な男たちが突っ伏している

その周りには砕けた鎧の破片と剣

「聖騎士ってのもこんなもんか」

神殿協会の聖騎士と言えば、例え殺し名と言えど、恐れ戦くと聞いていたから楽しみだったのだが・・・・・期待はずれにも程がある

まあ、鈴蘭を守れたってことでよしとするか

そして、斬識が臨戦態勢をといた瞬間

時間が空気が、止まった

それは俺も例外ではない。

殺気を感じたわけではない、強烈なプレッシャーを感じているわけでもない

ただ、本能。直感的に悟っていた

迂闊に動けば、死ぬ

「くすっ」

バッ

反射的に振り替える
死ぬとか死なないとか、一瞬頭から消え失せ、迂闊に動いてしまった
それが結果的に功を奏したかはわからない

気持ち悪かった
ただただ気持ち悪かった。不意に嗚咽をもらす
殺意に敏感な零崎だからこそだろう
その圧倒的憎悪
感じずにはいられないほどの、圧倒的———否、絶対的な憎悪

「正解よ。さっき、あなたが僅かでも動いたら殺すつもりだったもの」

うふふと“それ”は笑う

一言で表すならば“白い女”
透き通るような白い肌。絹のように白い髪にフードを被った、純白のローブ姿

その整った顔は邪悪なほど無邪気に歪んでいた
その目は開いていなかった
こちらが見えていないはずなのに、感じる彼女の視線。
視線で人を殺せるかのような、鋭い視線

“これ”は、一体何だ？

人間なのか？

「あんた、一体誰だ？」

震える喉から僅かに絞り出せたのはその一言

「くすくすくすっ、一体誰だ？それはこっちのセリフなのだけれど。面白いわ、あなた本当に面白い。ねぇ何で？何であなただけ、先が見えないのかしら？」

彼女は笑う
本当に心の底から愉しそうに、愉快そうに

「一体なんの話だ？」

「うふふ、まあいいわ。あなたは生かしておいた方が楽しそうだもの。しばらくは、何もしないであげる」

こいつは危険だ
こいつは

今

殺す！！

鞘から刀を抜こうとした瞬間
「ひれ伏せ」

たった一言

気づけば俺は地面と平行になって、そのスーツを土で汚していた

「！？」

今俺は一体なにをされた？

全く知覚出来なかった

「せっかく拾った命。大事にしなさい」

彼女はそういい残すと、パッと消えた

まるで幻覚を見ていたかのような感覚に襲われた。しかし次の瞬間

どっと、流れ始めた汗によってこれが現実と認識した

悪の組織対神殿協会（後書き）

マリーチさん初登場――――――ッ

ということでどうだったでしょうか。

少しは面白くなったでしょうか？

楽しんでいただければ幸いです

戯言シリーズ人間シリーズしか読んでいない方にも楽しめるように、

それっぽくしてみたのですが、いかがでしたか？

ではまた次回

感想などあったらお願いしまーす

敗北と開幕

おおよそ１０分、いや、もしかしたら一時間だったかもしれない。
斬識はそれだけの時間身動き一つとることが出来なかった
「・・・・・」
あいつは一体なんだったんだ？
まるで人間と会話していると思えなかった
「斬識くん」
「うわぁ」
背後から話しかけられ、先のこともあり驚いてしまった・・・・・恥ずかしい／／／
今鏡があったら速攻で割るね、うん。
「みーこさん。驚かせないでください」
着物を着た彼女はふわふわと浮かびながら、目の前に移動してくる
「ごめんなさい。たぁくんが、斬識君をすぐに呼んで来いって言うから・・・・・」
「社長が？」
□□■■
連れてこられたのは地下。まるでアールピージーのようなダンジョ

ンはあちらこちらに亀裂が入っていた
恐らく何らかの激しい戦いのあとだろう
そこで待っていたのは貴瀬に沙穂、リップルラップル、そして、縄で縛られ気絶している勇者が一人
確か———長谷部……なんだっけ？
まあ、勇者（笑）はともかくここについた時点で一つの疑問が生まれた
「鈴蘭は？」
「ああ、彼女は神殿協会だ」
あっけらかんとした予想外の返答だった
何？
「今は冗談を言っている場合か？」
「事実だ」
「説明くらいあるんだろうな」
「責任くらいは果たすさ」
□□■■
「さて、どこから話したものか」
場所を移しクルーザー、スタイリッシュな椅子に深々と貴瀬は腰を掛ける

「全部だ」

「気張るな。慌てなくても話そう……そう、あれは5年前のことだ……」

「すまん、かいつまんで頼む」

長ぇよ

「ふむ、まず種明かしといこうか。貴様らとイカれと糞ガキが展望台で鉢合わせたあと、直後に神殿協会が僕の屋敷を見つけ、こうして鈴蘭と糞ガキ（勇者）が入れ替わる形となった。これが偶然だと思うか？」

「これはあくまであんたの計画のうちだと？」

「正確には、僕とフェリオール……ふぇりっくんと言えば君にもわかるな」

成る程確かにフェリオール———司教クラスの人間なら、情報操作は容易いか

「ちなみにイカれ……クラリカはフェリオールの犬でな、異端審問会第二部というものがあってだな、神前裁判にかけられぬ連中を直接暗殺する部署のものだ。彼女はそこのエージェント。フェリオールはその部長だ」

「第二部は神殿協会のトップ預言者の直轄だそうでな。しかし今回の勅命は水面下で行えば勝ち目はない。かと言って真っ向から対立したのでは被害がデカ過ぎる。そこでうちに話が来た。ゲートを潰

すこと自体はこの国のトップからも来ていたので引き受けた」
水面下――――つまり司教のフェリオールが表だって対立出来ない人物が相手ということか
一体誰だ・・・・・いや、考えるまでもない、司教クラスが手を出せない階級は二つそしてフェリオールが預言者の直轄だとすれば
「枢機卿クラスが日本に来ているのか！？いや、だとしても何故そんなことをする必要がある？」
神の降臨は協会の望むべくだろう？
「それが預言者の意にそぐわない神ならどうする。つまり邪神と言うやつだ。・・・・・ゼピルムは知っているか？いや知らないだろうな」
「ゼピルム・・・・・」
聞いたこともないんだが
「簡単に説明すると魔人で構成された闇の組織だ」
「そいつらが枢機卿と繋がってると」
くくっ、と喉をならした貴瀬は頷く
「いかにも、何でも枢機卿・・・・・老いたランディル枢機卿は不老不死と引き換えに・・・・・人間を駆逐する邪神を降ろすとな。」
まとめると老い先短い老いぼれが、自己の利益のために、未来有望

な多くの人間を犠牲にしようとしていると
つまりそいつは“条件”を満たしたわけだ
「君はどうする？僕たちはこれからこの糞ガキを使って神殿協会に殴り込みをかける予定なのだが、ここからは今までのような遊びではない。油断すれば君といえども必ず死ぬ。それでも行くか？」
行くか、否か
答えは決まってる
「俺は行かねぇよ」

□□■■

「計算外だ・・・・・」
顔に手のひらをあて、下を向く貴瀬
「どうしたのたぁくん？」
ふわふわとみーこが貴瀬の下に漂ってくる
「だから君はいつになったら、その呼び方を止めるのだっ！！」
貴瀬は宙に飛び後ろ回し蹴り
全く彼女は昔から共にいるがゆえに、なれなれしい
第一たぁくん等、僕は社長だぞ。威厳が全くないではないか

「たぁくんひどい、……どうしてこんなことするの？」

「その呼び方を止めろと言ってるのだ！！この役立たずが！！鈴蘭の方がまだ使えるわボケ！！」

牙向いて噛みつきそうな勢いで貴瀬は怒鳴り散らす

「ふん、まあいい。みーこ君はもう戻れ」

「くすん……ごめんね、たぁくん……」

いや、実際謝るべきは貴瀬のほうだが。

「いいから戻れ。ここからが本番だ。しっかり働いてもらう」

はい、と頷いたみーこは少し嬉しげに駆けていく

何が嬉しいのか、貴瀬には理解できない、もしかしたら彼女にしかわからない感覚なのかもしれない

それにしても、まさか斬識が断るとは

今までの様子からして奴の腕は沙穂のそれより上

まさか、翔香以上なわけは無いだろうが、戦力低下は否めない

うーむ、てっきり斬識の奴は鈴蘭に惚れていると思ってたのだが……まあいい、沙穂と糞ガキがいれば事足りるだろう

それに……

ふと、みーこが頭によぎる

万が一の時は、奥の手を使うまでだ

□□■■

鈴蘭は目を覚ます。そこはいつもと違うベッドの上だった。シーツは柔らかく、掛け布も軽い。天井の代わりに天蓋が見えた

着ていたのはシルクのパジャマ。
まるでご婦人方が着ていそうな上品なデザイン

（お・・・・・お姫様とお呼び・・・・・・？）

上品な服を着ていてもやはり、鈴蘭は鈴蘭だった

いやいや、そんなことより
頭を何度か振り思い出す

確かご主人様の屋敷で気絶して、今気がついた

（ってことはここ、神殿協会なのかなぁ）

窓がない白い壁。部屋と言うより、むしろ監獄をそこから連想させられる

壁面に唯一色のある、両開きのドアまで歩き、ノックしてみる

「あの―おはようございまーす・・・・・鈴蘭ですー」

ほどなくして声が返ってくる

「お目覚めにございますか？」

現れたのはクラリカとはまるで正反対の粛々としたシスター……

というか、彼女が元気よすぎるだけで、この姿こそノーマルなのだが

その両手に戴くように携えたのは衣類

「こちらにお召し替えを。フェリオール司教様より、お話をしたい、

とのお言伝てでございます」

□□■■

「それでは失礼しました」

部屋からフェリオールが退散する

フェリオールの話を簡単にまとめるとこうだった

私が聖女として祈れば、魔と人の闘争に終止符をうち、世界に平和

が訪れる……多分こんな感じ

（でも……）

ご主人様は私が祈れば世界が滅茶苦茶になると言っていた……フ

ェリオールと伊織貴瀬、どちらを信じればいいのか。いや、答えは

決まっているような気もするけど

今の私には二つの道がある。善か、悪か。光か、闇か。

こんなとき、あの少年。いつもふざけていて、メイドを追いかけ、

そのくせたまに、暗い影を帯びるあの少年

あいつならどんな選択をするのだろう？

鈴蘭はそんなことを考えた

□□■■

「なに！？ランディル枢機卿が！？」

目を覚ました翔希は貴瀬の話を聞き驚愕していた

「うるさいぞ、糞ガキ。少し静かにしろ」

そんな、馬鹿な。いくら何でも枢機卿だぞ？あの神威の雷光とまで言われたランディル枢機卿がゼピルムと？

「貴様、いい加減にしろ！？」

「だから静かにしろといっている。これ以上うるさくするなら、ドクターに頼んで、協会初のドリル勇者にしてやってもいいんだぞ？んん～？」

バンッと部屋の扉が勢いよく開けられ外から白衣を纏ったドクターが現れた

「いひっ！？ひひっ！？た、貴瀬ぇっ！？今、ドリルをつつ付けるといってなかったかひぃぃぃぃ！？い、今ならささ三十分でつけてあげるよぉ！？」

ひぃひぃと息を切らしながら、ドクターはまくしたてる

「いいか、糞ガキ。貴様の選択肢は二つ。抵抗せずこちらの言うこ

とを信じるか、ドリル勇者翔希として名を馳せるか。好きな方を選べ」

「ちょっ……待て！」

「彼は本気だぞ」

「いひっ、ひひひっ！待たせたねぇ！楽しい時間の始まりだぞぉ！」

円錐型のドリルを脇に抱えて彼はいきなりメスを振りかざしてきた

□□■■

「ちっ、使えん糞ガキだ。こちらとしてはドリル勇者となった方が、戦略的に万々歳というのに」

「いや、さすがにそれは……」

ドリルが武器の勇者か。いまのご時世何が流行るかもわからないし、意外とそんなＲＰＧがあったりして……ないな

「いまこの船はどの辺りにいるんだ？」

「東京湾だ。あれを見ろ。」

甲板へでた伊織が船の向かう先を指差した

星空の下夜風凪ぐ茫洋たる水平線の近くに、そこだけ暮れたことを忘れたような青空が浮かんでいる

「ヘブンズゲート？」

「そうだ、これからあれを潰しにいく。神殿協会に殴り込みだ」
「無理だ。おそらく神殿協会の周囲には神託を受けたものしか入れない結界がはられている。」
「馬鹿か貴様は？だから神託を受けた勇者の貴様がここにいるのだ」
「だがっ・・・・・！？」
「だがもしかしもない。いい加減覚悟を決めることだな」

俺が、神殿協会と戦う？
ランディル枢機卿が敵？
畜生、まるで悪夢だ

「ここがブリッジだ糞ガキ」

貴瀬に通されるがまま、翔希は入る
照明の控えられた室内、何かの木箱に乗った小さな女の子が、操舵輪にしがみつくようにしている

「大丈夫か伊織！？」
「まあ、落ち着くの。タイタニックは鑑賞済みなの」
いや、タイタニックは大西洋に沈むのだが

「気にするな。真っ直ぐ進んでいるだけだからな」

他には無線機におろおろと訴えかけるみーこ。それと沙穂がぼーっと海原を眺めている

「ええい、貸せみーこ。だから使えんというのだ。聞こえるか？ああ、僕がこの船の主だ。話は通っているだろう。そう伊織だ」

伊織が受話器を置くと先程までこの船を牽制していた、巡視艇が船首を返し遠ざかって、あろうことか斜め後方につき護衛するように並走し始めた

「貴様何者だ伊織！？」

なんとなく叫んだのだが意外な返事が伊織からきた

「ん・・・・・ああ、そうかクソガキ。翔香からは聞いてないのか」

「姉ちゃんが・・・・・ってどうして姉ちゃんの名前が出てくるんだ！？」

「伊織家は長谷部家と同じ、いや、厳密には同じとは言えないいか。どちらも神殺しの家系だ」

「なっ・・・・・！？」

「豪剣の長谷部、剛弓の天白、本流の名護屋河・・・・・そして邪流伊織」

伊織は眼鏡の橋を押し上げ、レンズをぎらりと輝かせた

「去りし世に、神殺し四家と罵られた者共の血脈だ」

□□■■

「元より、僕たちには普通じゃない力があったわけだ。力があるから勇者に選ばれ、聖女なり魔王にもなれる。あるいは遥か昔の太古の血が神殺しの形で蘇ったのかもしれないな」

鈴蘭が魔王の系譜だというのか？

「戦後に業を絶やした天白家はともかく、今回それらが巻き込まれたのは必然かもしれんな」

接岸したクルーザーから降りた翔希は彼の言葉を聞きながら歩いていた

「俺は小さい頃教えられていたんだ。長谷部家は神殺しの、悪の家計だって……なんだか、無性に悔しくてさ。だから俺は勇者に選ばれた時に誓ったんだ。絶対に強く、誰よりも強くなって、そんな汚名雪いでやるって……」

「そうか、皮肉な話だ。」

「ああ、そうだな。俺達の先祖もこうして協力して神を討ったんだろうな」

「いや、四家とも恐ろしく仲が悪かったらしい」

「……」

だから、他の家の話を聞かされたことがなかったのだろうか。

語り合う二人の後ろから、リップルラップルがてこてこついてくるそのまた後ろには、口をつぐんだまま楚々と歩くみーこ。ドクターと沙穂は船に残るようだ

「こんな小さな子まで連れていくのか？」

「仕方ないのだ。沙穂の刀は貴様が折ってしまったし、それにリップルラップルは魔人だ。僕としては保険のつもりだが、この子は魔法が使える」

あんぐり

「こ、こんな小さな子がか！？」

魔法は魔動力を意思によって統制するものだから、当然、強固な精

神力が必要となる。勇者と認められた翔希でさえ、血反吐の出るような訓練の末に形にできたのは高校に入ったばかりのことである
その年齢でさえ指導に当たっていた、神殿協会の関係者はさすが勇者と驚嘆していたのに
この幼女と表現できるほどの子がそれをこなす
翔希は魔人という存在にわずかながらの妬みを抱かずにはいられなかった
そして閑散とした倉庫街の前に伊織が立ち止まった。彼が取り出したリモコン一つでシャッターが静かに上がっていく
中にはただ一台の車議員の公用車のようなセンチュリーだ。

「さっさと乗れクソガキ。悪の組織の凱旋だ」

□□■■

都心に向かうにつれ人並みは大きくなっていた、世界各国から集まった野次馬の群れ
現代科学では想像もつかないゲートから、果たして奇跡は起こるのか
当然、神殿へとむかう車は渋滞に巻き込まれ進まなくなった

「弱ったな」
「何が、悪の組織の凱旋だ、だよ。カッコ悪いことこの上ないわ！」
「うるさい黙れ今はそんなことを言っている場合ではない」
「車を置いていった方が・・・・・」

至極真っ当な意見をもたらすみーこ
だが今は人混みが多すぎて、走っても間に合わないだろう
付けっぱなしの社内ラジオが神の降臨まで二時間を切ったと伝える
「くそ、斬識か鈴蘭がいれば、ところ構わず、アクセルを踏むのだが・・・・・」

そうなのか？

あの斬識とか言うやつならまだしも鈴蘭が？

翔希が首を傾げたとき協会のシスター姿の何者かが、沿道の人々を薙ぎ倒しながら走ってきた

その人物はこの車を見つけると張り付いて、ばんばんと窓を叩きながら

「なーにやってるんですかっ！？」

「それはこっちの台詞だろクラリカ！？」

ウインドウを下げ、思わず叫んだ翔希は道端に這いつくばった通行人を指差す

「主の御加護もない俗世の腐れ一般人なんてどうでもいいっすよ！それよりもう儀式が始まっちゃってるっす！！」

「どう言うことだイカレ」

「よぉぉっく聞くっすクソ悪党！！鈴蘭さんが薬を飲まされました！枢機卿は儀式を前倒しして進めてるっす」

「なんだと！？」

唾を飛ばすシスターの顔を引き剥がし、伊織は舌打ち。

どうやら協会と悪の組織が結託していると言うのは事実のようだ

にしても仲は悪いようだが

「イカレ、どうにかして、神殿まで行けないか？」

「斥破を使えば一発っす」

斥破———その効力は字の通り退けること、威力を高めれば爆発的に物を吹き飛ばすことも可能だ

意図を悟りクラリカはボンネットに飛び乗った

そして銀の小杖を構える彼女を見ながら、翔希も全てを悟る

「おい！？伊織！？クラリカ！？」
「イカれの魔力がどれだけ持つかが勝負だ」
「それは運転する腐れ外道のテクと根性次第っす」
ふっふっふ
二人の笑顔はぶっ壊れている人間のそれ
多分押し退けられた、車がどうなるかは考慮されていないだろう

「斥ッ！！」

クラリカの掛け声と共に車はタイヤを掻き鳴らし、あり得ないスピードと角度で進んでいった

□□■■

聖堂。広大な石造りのドームの中に、幾百人もの信徒がひざまずき、無数の燭台のゆらめきに淡い影が揺れる
鈴蘭は壇上から、何の疑いもなくその光景を見下ろしていた
全てが私に頭を垂れいい気分
厳粛な趣のフェリオールに手を引かれ、壇の中央に進む
向かう先には白髪白眉白髭の老人一人、枢機卿ランディルは赤い法衣で年齢を感じさせぬ長身を固め、錫杖を手に、厳かな眼差しで鈴蘭を迎えた
「さあ、聖女様」

別れ際のフェリオールの声
鈴蘭は恍惚とした目を彼に向ける。彼は合わせた目を細めた
寂しさ？悔しさ？諦め？
古の巫女たちのように、薬品によってトランスをもたらされた鈴蘭
にはわかるはずもない

「この最も素晴らしい日に皆に伝えねばならないことがある」
ランディルの声にフェリオールが立ち止まる
「光より目を背け、真教を疑い、神威に背いたものがこの中にいる」
「フェリオール・アズハ・シュレズフェル」
彼へ、振り返らぬ若き司教は満場の眼差しをその背中に集めた
場内は静寂に包まれる
嘘か冗談かを見極めようとするかのように
だがフェリオールが聖騎士によって拘束され、疑う余地のないもの
になり、騒然とする
「さあ、聖女よ祈るのだ」
「はい……」
言われるがまま、鈴蘭は目を伏せ手を組む

信じる、信じる、信じる
鈴蘭は神が降りることを信じ、その光景を想像する
（お空が、ぱーっと割れて……）
その光景は現実世界に反映される
ゲートが一息に輝きを増し、静寂な光はスタンドグラスを通して降り注ぎ、楽園のを具象したかのような美しさに、感嘆の声が沸き上がる

「扉は開かれた！さあ、主は今こそ……」
「光よ導け――ライトニング・レイ！！」
ゲートを上回る白き閃光勇者と司教以上のみが習得使用が許される光輝系系統魔法がドアを打ち砕く
立ち込めた奮迅のなかに、現れた影へランディルが目を凝らす
「神聖なる儀式を穢さんとするのは何者だ！」
問いに答えるため敢然と進み出たのは未だ輝き冷めやらぬ剣を片手に正義の化身かと思わせるほどの実直な眼差しをした少年
「俺は勇者翔」
それを背後から蹴倒し、踏みつけ現れた青年が笑う
「悪の組織だ」
□□■■

「遅いですよ、貴瀬」

「貴様の犬が存外に使えんかったのでな」

リップルラップルに、うつ伏せに引きずられてきたクラリカが「ども」と手をあげて気絶した
それを介抱にかかるのはみーこ

「枢機卿、もう終わりです、我が師よ。いつまで道化を演じるのですか？一体どこまで私を失望させるおつもりです。預言者様は全て見ておられます。あなたの裡まで、全て。ゼピルム等と手を組み得た永遠の命に何の価値がありますか！その引き換えにどれだけの命が奪われるか……！」

「実に……実に愚かな」

必死の説得は枢機卿の掲げた杖に否定される

錫杖の動きにつられるように鈴蘭が天を仰いだ

降り注いできたのは光
それはランディルそのものに、また、その傍らにひざまずいたままの鈴蘭を焦点とするように収束し始める

「今だくそがき！」

伊織の声に、蹴られたまま彼の足元に伏せていた翔希は走り出した
静止からトップスピードまで、一気

「鈴蘭！」
突如として現れた勇者に急いたランディルが振り返ったときには――
――翔希は薄ら笑いの鈴蘭をさらうように、光の中から転がり出ていた
同時、光がやむ
「しっかりするんだ！鈴蘭ッ」
翔希は腕のなか、紅に染まりかかった鈴蘭の瞳に呼び掛ける。
「せん……ぱい……？」
鈴蘭は意識を取り戻した
「助けに来てくれたんですか？」
「ああ、もう大丈夫だ」
「斬識くんは？」
「斬識？ああ、あいつならわかは知らんが来てない」
来てないのか
何となく、私を助けてくれるのは彼の気がしていたんだけど
残念
（……って何を残念がってるんだろう私）
「おのれ小僧ッ！」

ランディルの怒号は銃声によって掻き消される
貴瀬の手にはＨ＆Ｋ社のＭＰ－７が握られていた・四五ＡＣＰクラスのカートリッジで１・６ｇの小径弾頭をすっ飛ばす。そうして放たれる弾丸の速度は、通常の消火器を遥かに凌駕する音速の約二倍
強固な魔導皮膜（マジックコーティング）を施された、枢機卿の法衣とて、所詮布
二百メートル先の軍用防弾ベストを貫通するエネルギーは、常人が銃撃を受けるのと遜色ない威力を発揮した

それが二発三発とまだ続く
銃弾に体を踊らせ法衣を血に黒く染め崩れ落ちる老体

「おの……れ……聖騎士はなにをしている！？」

「無駄です。私の配下には何人たりとも聖堂へ立ち入らせぬよう命じてあります」

「くっ……！聖女よ！」

翔希は気付き腕の中へ視線を落とした。
鈴蘭が目を見開いている。自信を失ったような狂った笑顔で

「鈴……蘭……？」
「ゲートを全解放します。主が降臨します」

光が聖堂の天蓋を突き破りランディルの哄笑が響き渡る

そしてゲートは失せ月しかない
静寂と闇の中傷の失せた枢機卿だけがおぼろげな光をまとっている

「見よ。神は、ここに降りた」

□□■■

「クソじじいがぁっ！」

貴瀬が怒りの形相で発砲するが弾は不可視の壁に遮られる

魔導障壁（マジックシールド）使い手の技量次第で、いくらでも強化できる

術者が雷神の二つ名を持つランディルほどの人物であれば

「失せよ。悪」

「かはっ！」

ランディルが錫杖を向けると貴瀬は稲妻に打たれ弾き飛ばされる

（……！）

我に返った鈴蘭がまず悲鳴した

「せんぱい！ご主人様……」

「大丈夫……俺は平気だ」

翔希は精一杯の虚勢を張るがそうは見えない

壁にフェリオールが入り口近くにはクラリカがただ立っているリップルラップルとそれに寄り添うみーこ

鈴蘭は絶大な力を得た老人を睨めつける

「あなたは……」

「そう睨むな。さあ力を捧げるのだ。まだ私は完全ではない。汝を苦しめた輩たちに神罰を与えてやる」

「あっ・・・・・・!?」

ランディルの視線に射ぬかれると、胸の裡にどす黒い者が浮かんできた

親に捨てられた記憶

それを差別され蔑まされた

当時の全ての思いが根こそぎに、掘り起こされる

「・・・・・・!?」

数々の会話。

伊織の視点、フェリオールの視点、クラリカの視点、

全ての画策が鈴蘭に露となる

ランディルが中継して彼らの記憶を流してるのだろうか?

「わたしを・・・・・みんなが?」

「そうだ。こいつらは全員貴様を利用したのだ。今まで貴様を蔑み、いいようにしてきたやつらと何も変わらん」

ご主人様もフェリオールさんも皆・・・・・・みんな

「それは違うぞ。鈴蘭!」

伊織は叫ぶ

だが真偽はわからない

何故彼が叫んだのか

言い訳のため？弁明のため？保身？保険？
そんなことどうだっていい
だって

「私知ってましたから」
「ッ！？」

反応したのは貴瀬

「だって、いつだって騙されて、人生送ってきたんですよ？ご主人様演技が下手すぎですよ。バレバレです」

今さらそんなことで私の心は揺るがない

「……そうだ。確かに僕は君を騙していた。否定はしない」

情けなく仰向けに転がった青年を鈴蘭は見た

「だが、これだけは言っておくぞ。信じたのは君だ」

（……ああそうか）

ようやく、本当にようやくわかった
いらついたのは信じられなかった自分だ
皆のことを、ましてや自分さえも信じきることが出来なかった奥底の自分
ご主人様と出会ってから彼のやり方は無茶苦茶だった
その無茶苦茶な中で会った斬識くんはもっと無茶苦茶だった

銃弾を刀で弾いちゃうし
大変だった
けど
それを二人が意図していたのかはわからない
けど
結果として思い返してみると私は信じた
騙されていてもそれでも信じた
伊織を信じ
フェリオールを信じ
翔希を信じ
斬識を信じた

まあ、本当に騙してなかったのは、翔希と斬識だけだったけれど

貴瀬もフェリオールも画策をしていたけど、わたしを、二十億の借金を背負い生きると言ったわたしを信じてくれたから

私は答えなければいけない

「見えるぞ。神になった私には。汝を苦しめたもの全てが。さあ、愚者たちを一掃し新たな世界を作ろうではないか」

ランディルが手をさしのべる
暖かく慈愛に満ちた手
孤児院の園長先生のよう

「さっき見えました。皆の心と一緒に、あなたも結局騙してたんですよね。ゲートなんてただのハリボテ、嘘っぱち。神も、神を降ろすための聖女もいない。あなたはただ私の、魔王の血が欲しいだけ。力を手にいれ神に成り済ます演出をした」

それに呆気をとられたのは貴瀬とフェリオールの二人
今まで振り回された分いい気味

「そうしろと“ゼピルム”に言われたから。神に成り済まし表からいいように人間を支配する。そして私の魔王の血であなた自信が魔王になるつもりだ。」

もはや隠しきれないと悟ったか、
ランディルは本性を露にする

「それがどうした、小娘。どうせ汝では我に敵うまい」

その時鈴蘭が思い浮かべたのは父と母の顔

「みんなそうでした。最初は笑顔で優しくて……最後に裏切るんです。でも」

鈴蘭は笑う

「それを信じた私がいたんです」

鈴蘭はまた笑う

「親には捨てられたし、借金も押し付けられましたし、麻薬を強奪させられました。でも恨んでなんかいません。いや、むしろ感謝しかありません。だってその中の誰か一人でもいなかったら、私はここにいませんでしたから」
捨てられて棄てられて
自分は要らない子だって思い知らされて、何度自殺しようと思った

かもわからない

だけど、さっき見せられたみんなの目に写った私は楽しそうだった
私は楽しかった

「だから、私は、みんなを守らなくちゃ」

さあ、応えよう。わたしを信じてくれた皆に
今、信じた私に
鈴蘭は短剣を拾い上げ立ち上がる。
「ほぉ、勇ましいな。その短剣で我に挑むか」

「違います。」

そう、これは。私にしか出来ない戦い
鈴蘭は刃を己の首筋にあてる
これは命を捨てるのではない
生かすのだ皆を未来へと
私の死でみんなが幸せになる。ならばこの死は私の価値
私が生きてきた最大の幸せだ

「あなたには、なにもあげない」鈴蘭は首筋を掻き切った
後悔なんてない
いや、これは嘘だ
友達にさよならしてないし
先生にも挨拶していない
そして誰よりも、もう一回だけでいいから

（会いたかったなぁ、斬識くん）

彼は滅茶苦茶でハチャメチャで誰よりもわたしを振り回してくれたけど、ここ最近では一番楽しい時間だった

歪んでいく世界に笑顔で別れを告げた鈴蘭は崩れ落ちた

だが鈴蘭の勇気の満ちた行動を見て笑うものが一人

「ははっ！ははははっ！！愚かな。自ら死を選ぶとは！」

狂った老人は鈴蘭の体内に手を沈める。おぞましい気の後に、彼の手中には美しい翡翠色の輝きを放つ、光の玉が握られていた

「易々と力を明け渡すとは！あまりに、あまりに滑稽！信じる？幸せ？下らん、実に下らん。所詮弱者の戯言！」

ことさらのように老人は少女の顔を覗き込む

「犬死にせよ。ふはははははっ！」

「光よ、勇者の名の元に集え！」

腹腔の傷もそのままに、翔希は叫ぶ

「ライトニングエクスプロージョン！」

「甘いわっ！」

ランディルは苦もなく避ける

だがそれでいい。ただ鈴蘭とランディルを引き離すためだけにうったのだから

そして、ランディルは避けると同時、鈴蘭から奪った翡翠の玉を己の身に取り込んだ

□□■■

血溜まりに沈んだままの鈴蘭は、自分の意識が遠退いていくのをゆっくりだが確実に感じていた

まだ、周囲の音は聞こえている

「がっ」

「ふはははははっ、死ねぃ！」

翔希の呻き声とランディルの勝ち誇る声

どちらが優勢かは火を見るより、いや、見なくとも明らかだった

フェリオールも何かを叫んでいるが、その声には焦燥しか感じられない

（私のしたことは……無駄だったのか）

それどころか、状況を悪くしただけ

（一生懸命生きてたつもりなんだけどなぁ……）

体が冷えていく心が冷えていく

闇が限りなく近くに迫っている

その鈴蘭の闇に沈みつつある視界に映像が飛び込む

鈴蘭は死の感覚の中止め処もなく泣く
悔し涙ではない。嬉し涙だった
鈴蘭はその目に飛び込んできた人物に頼む
「あとは……お願い」

□□■■

「あがッ！！」
ダンッ
と鈍い音をたて翔希は壁に激突する
「……ちくっ……しょう！！」
立ち上がらねばならないのに
一秒でも早く、目の前の敵を倒し、鈴蘭に回復魔法をかけなければ、
病院に運ばなければ、いけないのに
（……体が、……もう……ッ！！）

「どうした、フェリオール。もう終わりか」
フェリオールは息を切らし立っているだけで精一杯なほど衰弱していた
もはや、魔法の一つも放てない

「屈せぬか……。ならば諦めさせてやろう。現れよ四人の選ばれし大強者よ！まあ、大強者といっても中身はゼピルムの魔人どもだがな」

「なっ！？」

ランディル一人も倒せないと言うのに、さらに四人だとっ！？

翔希は現れるだろう、敵を打倒するため立ち上がる
足が動かぬとも
手がもげようとも
立ち上がらねばならない
それが勇者だ

翔希は自分に渇をいれるが、その必要は無くなった

いつまでたっても、大強者の姿は現れない

「なに？」

ランディルは狼狽する
その姿を見る限りこれはイレギュラーらしいが

だが、チャンス
動揺し隙ができた。殺るなら……今！

翔希がランディルに飛びかかろうとしたとき

入り口のドアがぶっ飛んだ

□□■■

蹴破られたドアから大強者・・・・・魔人を三人のうち両端にいた若い二人の男女がおざなりに投げる

投げられた魔人の鎧の隙間からは決して少なくない量の血が流れている

誰もがその光景に息を飲むなか最初に口を開いたのはランディルだった

「貴様ら何者だ」

しわがれた堕ちて尚威厳に満ちたその声で問う

それに答えたのは端にいた女

「クフフフ、私達ですかぁ？

教えてあげてもいいですけど、ねぇ人識くん？」左の男がそれに答えた

「俺にふるんじゃねぇよ妹。ったく傑作だぜ。この俺が人助けだなんてよ」

「でも何だかんだで弟の頼みを聞いてくれるんだよな」

極めて軽い

まるで家族団欒のような会話

それはランディルの怒りに触れる

「貴様らは一体何者だと聞いているっ！！！？」

老人の一喝に大気はまるで怯えるかのごとく震える

だが三人は全く動じない

「私？私ですか？私は零崎舞織です。――――まあ、私たちはあれですよあれ」

「ちっ、俺は零崎人識――――何かと聞かれたらやっぱりあれだな」

「零崎斬識だ。――――あれじゃ、伝わらないよ人兄舞姉。んじゃ一斉に言おうぜ」

「「「殺人鬼」」」

敗北と開幕（後書き）

本当はランディルをフルボッコするところまでいきたかったんですけどうまくいきませんでした

感想とかあったらお願い致しまする

零崎一賊（前書き）

頑張って書きました
ちょい長めですが、見てみてください

零崎一賊

「「「殺人鬼」」」

瞬間ランディルに動揺
それは、雷神とも謳われた枢機卿らしくもない決定的な隙

（今しかない！！）

「っおぉおおお！！」

翔希は超加速、足の全筋肉をフル稼働させ一直線に駆け、片手に持つ剣を斜め下から上に切り上げる
ランディルは翔希が間合いに入った時点で気付くがもう遅い
そのままランディルの胴体は二つに別れる

はずだった

「ガッ！！」

実際には翔希の体は一ミリ足りとも進んでいない

（……一体何が！？）

ギリッギリッ

まるで体が縫つけられたかのように動かない

腕が足が
いや、それどころか指一本だって動かすことが出来ない
「にぃちゃん、下手に動かない方がいいぜ。俺の曲絃糸は特別製でね。拘束には向かねぇんだ」
いつの間にか人識と名乗った少年が目の前まで接近していた
身長は一メートル半ばよりやや低い。華奢なくらい細身で、手足の長い小柄な体格。タイガーストライプのハーフパンツ、無骨なブーツは安全靴だろう
上半身には赤い長袖のフード付きパーカ、その上に黒いタクティカルベスト。両手には指が出ている手袋、ハーフフィンガーグローブ。
そいつは、サイドを刈った長髪を頭の後ろで結んでいた。右耳には3連ピアス、左耳には携帯電話用ストラップを2つ付けている
右顔面には物々しくまた禍々しい、ペイントではなく刺青がほどこされていた
スタイリッシュなサングラスをかけているが、その仰々しい、刺青の威圧感は隠しきれていない
（これは……こいつの仕業か！？）
「何カッコつけてるんですか人識くん。ただ下手くそで加減がきかないだけなのに……俺の曲絃糸は特別製だ（少し声を低く）……ププッ笑えます。カッコつけてるのかもしれませんが痛すぎです、目に入れたら失明しそうです」
人識の隣で笑うのは女

顔面刺繍の少年よりもやや年下に見受けられるが、しかし身長はこちらの少女のほうが上である
下半身は女子高生らしいプリーツスカートに紺色のソックス、スクールシューズ。上半身は派手な色のジャージ
少女は目深にニット帽をかぶっていた

「うるさい、黙れ。」

殺気のこもった声で人識は言う
しかし、舞織は臆さず

「大体、何で私が出した服を着てくれないんですか！毎日ちゃんと用意してるでしょう！」
「うるせー！お前は俺のお母さんか！自分（てめぇ）の着る服くらい自分（てめぇ）で決めるわ！」
「ああそうですか。そういうこと言いますか人識くんは。もういいです。金輪際口を聞いてあげないです。この際言いますけど、その新しいサングラス、頑張ってるのかもしれませんが、正直ダサイです。」
「頑張ってるとか言うんじゃねぇ！いいか、お前がそういうこと言うから、実際は違うのに、俺がおしゃれに気を使ってるけど、ダサイやつみたいな悲しいポジションになるんだろーが！」
「大体人識くんはですね……」

ぎゃーすぎゃーす
どたばたどたばた

（一体なんなんだこいつら！？）

いや、しかし

今ならふりきることが出来るのではないか？
翔希が脱出するためもがこうとすると
「おっと動くなよ。弟には邪魔をさせないようにって言われてるんでな。これ以上動くなら殺すぜ？」
人識と呼ばれた少年は胸ポケットから取り出した小型ナイフを翔希の喉元に突きつけた
「……弟？」

「成る程、貴様も《零崎一賊》というわけだ」
「なんだ、知ってるやつもいたのか。なら話は早い。絶対に動くなよ、“殺したく”なってくる」

（……零崎一賊？）
一体何がどうなって
「糞ガキ、言う通りにするのだ。……こいつらは《零崎一賊》殺人鬼だ」
「な、なんだよ。その《零崎一賊》ってやつは」「貴様は《殺し名》というものを知っているか？いや、貴様のようなガキは知らんだろうが。簡単に言おう、《殺し名》は第二世界と言えば貴様にもわかるだろう？その末端にしてトップ。そういうやつらを指す」
第二世界のトップ

それはあれか。殺し屋だとか本当の意味での悪の組織とかそういうやつなのだろうか

「《殺し名》とはある七つの組織を示す
匂宮雑技団、闇口衆、薄野武隊、墓森司令塔、天吹正規庁、石凪調査室、そして零崎一賊」

隣で人識は不敵に笑い

「わかったら大人しくしてな。今、お前たちが会話出来ているのはのは、あの弟が我慢しろと言ったからだ
“その気”になればいつでも胴体とおさらばさせられる」

「だがいいのか？あいつ一人で戦わせて、死ぬぞ？」

「かははは、傑作だぜ！馬鹿か手前ら。逆だよ。まあいいぜ、よぉく見てな。
これから始まるのはバトルじゃないしデュエルでもない。俺達は戦うもの（ファイター）じゃない。殺人鬼（キリリングワーカー）だ
まあ、なんだただの虐殺さ」

□□■■

「貴様何者だ？」
「だから、殺人鬼だっての。何回言わせんだ耄碌爺」

売り言葉に買い言葉

零崎斬識はその声に含んでいる怒気をまるで隠していない
その視線にあるのは、うつ伏せになっている人
その周りにあまりに多く流れ出ている血の量は素人でもすぐにわかるだろう――――つまり致死量だ

「……お前か？」

「ぬ？」

語義を強くしてもう一度

「鈴蘭を殺したのはお前か？」

最終確認
こいつは“条件”を満たしたのか
鈴蘭を殺したのはお前か？

「ふはははは！なんだそんなことか。そうだな、我が殺したようなものだ！まあ、そこに転がっている屑も、感謝しているだろう。神である我の力の礎となれたのだ。光栄以外のなにものでもあるまい」

ふはははは！
と老人は亡骸をみて嘲笑する

そうか、ならいいか

殺してもいいか

「残念だ。いや、本当に。人の身ながらそこまでのレベルまで自らを研鑽した。その努力はとてもとおとく素晴らしいものだろう」

ですが
と斬識は続け
「それがこれから無意味になると思うと忍びなくてしょうがない」
「……なに？」
ピタリと笑い止んだランディルは本当にわかりやすく眉をひそめた
「貴様一体どういう意味だ。返答次第によってはただではすまさんぞ」
ランディルは壊れてしまいそうなくらい強く錫杖を握り締める
同時にピリピリと強い圧力を発しる
だがやはり、斬識が臆する様子はない
それほどまでの精神的余裕はどこから来るのか、貴瀬や翔希は不思議でならない
そして重苦しい空気の中斬識は答えた
「お前はもう終いだって言ってんだくそ野郎」
□□■■
「ふはははは！なんだそんなことか。そうだな、我が殺したようなものだ！まあ、そこに転がっている屑も、感謝しているだろう。神である我の力の礎となれたのだ。光栄以外のなにものでもあるまい」

「あーあ、あの爺死んだな」
ランディルの嘲笑に呟いたのは人識
「くっふふふ、ですねー。あーあ可哀想に死亡確定もンじゃないですか」
「これで完全に“条件”を満たしたってわけだ。かははは！傑作だぜ。久々にあいつが抜くところを見れるってわけだ」
（くそっ！馬鹿兄弟どもが！ランディルの実力を知らんのか、このままでは斬識が死ぬだけと言うのに）
舞織と人識はそんな伊織貴瀬の心情をまるで察することはなくペチャクチャと喋っていた
「これは最終勧告だ。貴様らはランディルの戦いを見ていなかったからそんなことを言えるのだろうが、このままでは奴は……斬識は死ぬぞ
確かに第二世界――人間同士での殺し合いなら貴様らは最高クラスかもしれない
だが、ここは第三世界、魔と人。ファンタジーと魔法の領域だ。奴が本気にならないうちに逃げるのだ。奴だって逃げるものをわざわざ追いはしないだろう」
貴瀬は重苦しい声で人識と舞織を説得しようと試みるも、やはり彼らが聞く耳を持つことはない

「だからさ、あんたも的はずれにも程があるぜ。既に奴は条件を満たした。斬識(あいつ)が本気になったら勝てるやつなんざいねぇよ……一人を除いてな」

（……馬鹿者が）

こっちは善意で言ってやってるというのに

貴瀬は内心で歯噛みするが、やがて諦めた

「なら、話を変えさせてもらおう。先程から出てきている、“条件”とは一体なんのことだ？」

「ん？ああ、そりゃ簡単だ。お前は俺達のこと殺人鬼ってこと知ってたんだよな？」

勿論それは知っている。だがそれ以上に斬識には価値があった

だからこそ今まで雇っていたのだ

「零崎一賊が殺人鬼と呼ばれるのはな、人を殺さずにはいられないからだ。それこそ呼吸をするように当たり前に人を殺す。気づけばどうやれば人を殺せるか考えている。一日一善ならぬ、一日百殺、それくらいしてもおかしくない程強烈な殺人衝動、それが零崎一賊のスタンダードなのさ」

それくらい調べはついている

だからどうしたというのだ

「おかしいとは思わなかったか？斬識は紛れもない殺人鬼だ。なのに殺している数が少なすぎる、いや、もしかしたらお前らの前では

一人も殺してないんじゃないか？」

それは、確かに
今考えてみれば出会った瞬間など僕たちを殺すには絶好の機会だったではないか。
翔希に至っては山では剣をへし折っていた。簡単に殺せたはずではないか
何故？

そして零崎一賊は殺し名の中でも最も忌み嫌われる集団らしいが、
それにしてはキャラが似合わなすぎると思っていた

「だが、それと今にどんな関係が？」

「あいつは零崎の中でも珍しい、というか三人しかいないんだが、
《食わず嫌い》でな。人間のことを愛してやまない殺人鬼、それがあいつなのさ
人が大好きで大好きでたまらないのに人を殺さねばその殺人衝動で潰されてしまう。そんなあいつの出した妥協点それが条件なのさ」

「妥協点だと？」

「そう、妥協点。そして限界点でもある。あいつが我慢できなくなるまでの、そして生きるためのな。
あいつは三振り刀を持ってるの知ってるか？」

「……ああ」

「あいつが普段使うのは、不殺の剣《砕牙》決して人を斬ることのない。重量５０キロの刃のない剣」

「なっ！？」

（……重量５０キロ？）

そんなものを、あいつは軽々と？
馬鹿な、人一人振り回しているようなものじゃないか

「大事なのはそっちじゃねぇよ。本命はもう一振り
妖刀《斬爪》」

「妖刀？」

「その通り。考えたことはねぇか？歴史上妖刀と呼ばれる剣は沢山あるが、いつも妖刀の持ち主は錯乱したり、殺人鬼になったりするよな？おかしいとは思わねぇか？どういう仕組みで刀が人間を狂わせるってんだ」

そんなこと簡単な話だ。今日まで受け継がれてきた、妖刀、魔剣と呼ばれる類いのアイテムには大抵強力な魔導力が滞在しており、その魔導力が人間の裡なる魔導力、つまり魔力や気を乱すことにより錯乱状態になるだけの話
稀なものでは魂を喰らう物もあると聞く。魂を喰われ正常を保てなくなった人間が妖刀や魔剣に乗っ取られ人殺しとなると

「でな、斬識の妖刀《斬爪》は魂を喰らう刀で、しかも本人が言うにはかなりの悪食らしくてな、同じ魂でも、汚く穢れの濃い方がいいらしいんだ
そして、人を殺さねばならない斬識にとっては好都合だった。幸か不幸かあいつは、人間個人が好きなのではなく、人間という種族が

大好きなのさ。殺す数は少なければ少ない方がいい。出来れば殺すのは死んでもいいやつ。
だから、間引きと同じさ。人間という種族の繁栄に邪魔になる人物しか殺さない。それが奴の“条件”だ」

□□■■

「我が終わり……だと？……くくく、ふはははは！！なら
ば見せてみろ貴様の実力！！」

瞬間ランディルは呪文を唱え始める
それは電雷系統の最も下級の術、だが雷神とも謳われたものが扱え
ばその威力は段違い
そして下級が故に最も早く隙のない業

「サンダラーズ・アロウ！」

ランディルの下から斬識に電撃の矢が飛ぶ

（速い！）

斬識は右に転がるようにして間一髪かわす

「まだまだまだまだぁ！！」
電撃の矢が二本三本十本と次々と繰り出される
それを斬識はかわし続けるが徐々に追い付かれる

（……なら）

抜刀一閃
砕牙を抜き地面に叩きつける
「何？」
砂煙が宙に舞い視界を奪う
この視界では魔法を当てることは出来ない
ランディルは斬識の奇襲に備え、魔導障壁を展開する
が、それは意味をなさなかった
砂煙が晴れると、先より後方に下がった斬識がいた
「どうした、我を殺すのでは無かったのか？その距離では攻撃出来ぬだろう？」
明らかな挑発
だが、斬識が扱うは刀。どのみち、近づかねばならぬ
「いやいや、すげぇや。その正確な射撃、連射性、威力。今の俺を絶命させるのには十分過ぎる。」
それは、斬識の正直な感想だった
相対して初めてわかる相手との力量差
「そうか、ようやく我を神と認めるか。
なら、今我に謝罪し悠久に渡って我の手足となることを誓えば我に対する数多くの無礼と非礼を許してやってもよいぞ」
勿論、これは嘘である

今のランディルの力を持ってさえいれば最早怖いものなど何もない
神殿協会やゼピルムを敵に回しても今のランディルなら上手く立ち回れる自信と実力があった
故に斬識を部下にする重要性はどこにもない

あるのはただただ、目の前の生意気な男を屈服させてやりたいという傲慢
「その提案には乗りませんよ。ていうか乗れないね。
頼まれちまったからなぁ。しょうがねぇよ、損な役回りだよ、利益なんてどこにもねぇし、楽しくなんてこれっぽっちもない。でもお願い、なんて死に際に言われたら聞かないわけにはいかねぇだろ？ここで聞けなかったら、俺はあんたと同じ人でなしになっちまうきっと人兄は『お前は鬼だろーが。傑作だぜ』とか言うんだろうね。だから、俺はあんたを倒さなければならない」

人である証明として
俺は人でいたいから

「ならば死ぬほかないぞ」

「死なねぇよ。確かに《今》の俺にあんたは殺せないけど……」

斬識はそこで会話を切った

「被告人ランディル・シア・エムネス枢機卿。
罪状殺人、死人罵倒、下の者は未来溢れる少女を身勝手な都合で殺し、さらに反省の色も見られず、さらに犠牲者を出そうとしている。
以下により情状酌量の余地はないと思われる」

冷たく言い捨て、終わりを告げた

「零崎を執行する」
斬識は砕牙を床に落とした

□□■■

ズシン

「・・・・・・！？」
斬識が投げた刀、砕牙からは普通刀を落としたら恐らくでないであろう音がした

（あの刀、一体何キロ！？）

気を取られたランディルは不覚にも斬識から視線を外してしまう

そして戻した時にはもう遅い

「っ！？」

（消えた？一体何処へ！？）

ランディルはあちこちを見渡し探すが姿が見えない
そして一瞬影を視界の中にとらえたと思った瞬間

ヒュン
ぼと

左腕を落とされた

「あっがあああああぁぁぁあああああ！？」

（速い！……一体いつ何処から！？）

全くといっていいほど、一瞬目をそらしたことも大きな要因だろうが、あまりに……あまりに速すぎる

「あんた、遅ぇな。こんなもんか」

侮蔑にも似た
いや侮蔑なのだろう
何人もの人間を犠牲にしてもこの程度なのかと
それはどちらかと言えば断罪に近いのかもしれない

「おっのれぇえええ！！」

額に血管を浮かび上がらせたランディルは魔導力を極限に高める

瞬間斬識の足元で爆発
さらにランディルを囲むようにして数百数千もの矢が現れ斬識に向け撃ち込まれる

しかし

「だから遅いって」

「なっ！？」

またしても驚愕
馬鹿な！？あれだけの攻撃を避けた？あり得ん第一避けるほどのスペースを作らないよう点でなく面の攻撃を行ったというのに

「っうぅぅうう！！」
最早唸ることしかランディルには出来ない

「？
もしかして、もう終わりなのか？いや、違うよな。仮にも神を名乗るんだ、まだ先があるんだろう？さぁ勿体ぶらないで、ここからが楽しいんだろ？さあさあさあ忙しいぞああ忙しい大盤振る舞いのてんてこ舞いといこうじゃねぇかほらほらほら早く詠唱とやらを行えよ急げよ急げよ急げよハリーハリーハリー殺し合いだ殺戮だ虐殺だ殺人だ抹殺だ惨殺だ斬殺だ撲殺だ刺殺だ絞殺だ銃殺だ黙殺だ必殺だ瞬殺だ」

「ぅぅうぅぅ・・・・・」

どうしようもならない
先の交戦で感じたのは圧倒的力量差、その差は地形や知恵でどうにかなるものではない絶体的差

こんなもの逃げるしかないではないか

□□■■

「は、はぇぇ・・・・・」

斬識の動きを見て呟いたのは翔希
そう特筆すべきはそのあり得ないほどのスピード
実際戦っていたランディルだけでなく遠目で見ていた勇者でさえ、
それをとらえきることが出来なかった

「かははは！傑作だぜ！あいつ、また一段と腕を上げたじゃねぇか！こりゃ、兄貴が見たら喜ぶだろうな。流石一賊最強ってところか」
「うっひゃあ。あの子が戦うところは初めて見たですけど、ここまでとは……」
「まさか……これほどとは」

人識、舞織、貴瀬がそれぞれ呟くと今まで後方でぶらぶらしていたリップルラップルが来て

「すごいの……まるでおかわり君なの」

ずこっ

翔希はわかりやすくずっこけた
斬識は斬識で驚きだが、この子の豪胆さも劣ってはいまい

確かにおかわり君は速いけれども
ちなみに５０メートル走なら片岡よりもタイムが良いらしい

ちなみにリップルラップルと一緒に後ろにいたみーこさんはすやすやと眠っていた
多分あまりの恐ろしさに気絶したのだろう

さておき

「俺の時は本気じゃ無かったのか……」

自然と奥歯を翔希は噛み締めた

悔しい

それが今の正直な気持ちだった

僅かにでも勇者だ、流石だ、最強だともてはやされて天狗になっていた自分が恥ずかしくてたまらない

何が勇者だ！たった一人の女の子も救えないで……

ギュッと握りしめたその掌は血が滲んでいたがそんな痛みを気にする暇もない

我慢するしかない

今はあの男を見ていよう

強くなるために

□□■■

「っくくくはははははは！」

途端ランディルが高笑いを起こした

「どうした？気でも狂ったか？」

否

最初はどうしようもない状況になりただ笑うことしか出来ないのかと思ったが

ランディルの目はまだ諦めていない

「確かに、そうだな。我と貴様では相性からすれば、貴様に軍配が上がるかもしれんな」

「どうした、降参でもするつもりか？言っておくがもう遅いぜ？あんたは、あまりに殺しすぎたんだ。観念しな」

「観念？なにを馬鹿な。そんなことをする必要がどこにある我は死なんぞ！」

斬られた腕を押さえながら、じりじりとランディルは後ろに下がる同時、魔導力を高める

「喰らえ、神威の雷光を！！ライトニングエクセキューション！！！」

それは、勇者でもまず扱えるものはいない、最上級呪文速さは秒速にして１５０ｋｍまさに雷神人一人蒸発させるには十分すぎる

しかし

「だから、遅いっての」

いくらその術が速くとも扱うのは人発動する直前に移動すれば当たることなどない

ライトニングエクセキューションは大気を走り地面へとぶつかり爆散した
そして、斬識がランディルを睨めつけると
「何？」
ランディルの姿が消えた
「ふはははは！！」
紛れもないランディルの高笑い
その方向を見ると
「馬鹿共が！我の勝ちだ！」
鈴蘭を抱えたランディルが虚空に浮かび上がり、その体はどんどん希薄となっていく
「くっ！不味い。斬識、やつは隔離世に逃げるつもりだ、早く止めをさせ！！」
貴瀬が叫ぶ
「ふはははは、こうなればもう何をしても無駄だ。聖女はもらって行くぞ。本音を言えばそこの勇者も欲しいところだが、まあ背に腹はかえられん。ゼピルムも聖女がいれば勇者などいなくとも許してはくれるだろう」
言い残し、ランディルは完全に消え去った
「くそっ！遅かったか」

「完全に……してやられましたね」

ランディルが消え、貴瀬フェリオールが悔しげに呟く

「社長。隔離世ってなんだ？」

「……俗に言う幽霊が住む、無段階深度の平行世界にジャンプしたのだ。かの地で起こった事象は現実世界には全く関与しないし関知することもできない。だが座標を移動してそれを脱すれば……外から関与出来ないのだから、逃走にも利用できる。無段階なのだから追うために隔離世に入っても同じ深度にたどり着くのは難しい……つまりやつを追うことは出来ん」

クソッ

と貴瀬は近くの壁を蹴る

「まだだ、まだ、終わってねぇよ」

斬識は五感を集中しランディルの気配を探る

しかし、何も感じない

まだだ、もっと、もっと集中しろ

全く関知しない？関与できない？そんなことあるものか。世界は繋がっているのだ、ただ、今まで感じることが出来るものがいなかっただけだろう？

ならば、俺が初めてになればいいことだ！！

目を瞑る

そこは闇

無限に広がる全てを喰らい尽くす漆黒
感性を研ぎ澄ます、より敏感により繊細に
闇の中に現れた純白の点が徐々に人の形へと変化する
感じた人の形めがけ飛ぶ、己を信じて

斬爪を渾身の力を込めて抜く
だが足りない、これではランディルには届かない
もっと早く
もっと速く
もっと疾く

「っおぉぉおおおおおおおお！！！！」

極限まで研ぎ澄まされたその剣は、空間さえ切り裂く――――！！

スッパァン！！

「ッかは――――！？」

呻いたのはその純白のローブを赤く染めた、ランディルだった

「がっ、ば、馬鹿な・・・・・どうしてここが・・・・・！？」

袈裟斬りにされたランディルは口から血を吐いた

「二つ気配がした。そのうち、複雑に動いている方が、あんたに決まっている
ただ、それだけの話だ」

「ふっ……くく、くくくく。空間ごと断ち切るなど、そんなことが出来るやつ、一人しか……知らぬ……わ」

ランディルが倒れると同時やつが抱えていた鈴蘭を斬識は奪い抱っこする

「ん？」

……これは

「おい、これ……！？」

斬識は何かを言おうとしたがそれは破壊音によって打ち消される

ご、ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「こ、これはまずい。全員建物からでて下さい。協会が崩落します！」

「一体どうなってんだ！？」

フェリオールが叫ぶ

「あなたのせいですよ、斬識さん！あなたが空間を無理に引き剥がしてしまったために、この一帯にある空間の軸が大幅にずれたので

す！！」

「ちっ！さっさと逃げるぞ！」

「さんじゅうろっけい、逃げるが勝ちなの」

「かはははは！こりゃ傑作だぜ！！」

「人識くん待ってくださいよー！！」

「皆さん急いで！！」

貴瀬はみーこを担ぎ出口にそれにリップルラップル、人識、舞織が続きフェリオールが逃げ出した

「俺も早く逃げねぇと……っあっ！」

それは不注意だった
いや、普段ならこんなミスはしないだろう
しかし、隔離世に逃げたランディルを探し出すという荒業を成し遂げた後、集中力が散漫になっていたせいか
瓦礫に躓いた

「っいで！！」

顔から着地
それでも鈴蘭の体を庇ったのは流石だろう

すぐに立ち上がったがもう遅い

真上にまさに大きさにして４ｍはあろう瓦礫が迫っていた
あ、俺死んだ
なら鈴蘭だけでも
意を決して鈴蘭を安全地帯まで投げようかと考えたが
駄目だこの距離を投げたら鈴蘭は確実に“死んで”しまう
万事休すか
「ライトニングエクスプロージョン！！」
聞こえてきたのは勇猛な声
瞬間瓦礫は爆散
結果として、斬識達には瓦礫は当たらなかった
「早く逃げるんだ！！」
声の主は翔希
魔法で援護してくれたのだ
ちぇ。結局、おいしいところは持ってがれるんだよな
羨ましいぜ畜生
まるで、勇者みたいなやつだ
□□■■
「いやー、大変だったねぇ斬識くん」

場所は貴瀬邸の庭先
鈴蘭が箒を片手に暢気な声で歩いている
「普通にしゃべってんなよ……まったく、死んじまったかと思ったじゃねーか」
右隣に並んで歩くは斬識
「いや～お恥ずかしい。ドクターは凄いねぇ」
そう、首をかっ切った鈴蘭が既にピンピンしているのはあのキチガ……もといドクターのお陰なのだ
鈴蘭が神殿協会にさらわれた前日、詳しいことなどはよくわからないが、鈴蘭は己の裡にある魔導力を引き出す手術をあのドクターから受けていたのだ
結果的に魔導力を自在に引き出すまでには到らなかったようだが、身体強化をすることに成功したらしい
その影響で鈴蘭は動脈を切ったくらいでは死なない体になっていたのだ
「……今更ながら、本当、滅茶苦茶だな世界ってのは」
「斬識くんがそれを言いますか……」
銃弾を空中で叩き落としたり
雷撃を避けたり
空間を刀で切り裂いたり

さておき

今回の話のまとめ

見事ランディル枢機卿の野望を打ち砕いた零崎斬識は、神殿協会で時の人となり、これを機にテレビ出演、さらにハリウッドや音楽活動など多岐に渡り大活躍し、活躍の舞台を血塗られた第二世界から第一世界へと変え、大成功をおさめ、その名を世界に刻むのであった

なんてことは勿論無かった

実際の所は

「ランディル枢機卿を殺した異端者はやつだー！！追えーーーーっ！！」

「「「おぉおおおお！！！」」」

「何で俺が追いかけられてんだーーーーーっ！！」

と崩壊から数時間フェリオールが聖騎士達に説明するまで散々追い回された

事情を説明し異端者ランディルを成敗したことで一旦は事なきを得たが、人殺しでさらに、協会を崩壊させた張本人なので次は殺すとのことだ

「絶対にお前に追い付いて見せる」

「頑張れ、その時を楽しみにしてる」

聖騎士達をなだめたあと宣戦布告したのは長谷部翔希
全くさっきまで鈴蘭が死んだと思ってピーピー喚いていた人物とはとても思えん

仮にも勇者と呼ばれる人物だ
鍛えればまだまだ強くなるだろう。これだから人間は面白い

そしてフェリオールに名刺を渡してから
貴瀬邸に戻って現在あの日から二日後である

「君達はクビだ」

「は？」
「へ？」

開口一番、伊織貴瀬は零崎斬識、名古屋河鈴蘭にそう告げた

クビって……え？二十億は？

「あの……報し……」

「なんだ君は。あの時貴様は行かないと言っただろう。その時点でクビだ契約解除だ。最後まで仕事をしていないのだ。報酬と言うのは最後まで仕事をしてから言うのだな」

そして思い出すのはあの言葉

“悪の組織だ”

まんまじゃねーか

「……鈴蘭と一緒に元の世界へ帰るがいい。
ランディルが消えた以上君達がいる意味は無くなった。
帰れなくなる前に僕達のように壊れてしまう前にな」

「で、……でも……」

すがるように手を伸ばそうとして、鈴蘭は出来なかった

「世俗へ帰れ」

鈴蘭はその行き場の失った腕を引っ込める

「はい……」

「それでいい……いい子だ。貴様もだ斬識」

「俺は雇われの身だからな。クビならしょうがない」

「……あ、あのさ斬識くんって何でも屋みたいなことやってるんだよね？」

鈴蘭が急にそんなことを言い出す
多分もう皆そんな設定覚えてないんだろうな
まあ、いいけど

「ああ、まあ」

「名刺頂戴」

「は？」

「だから名刺頂戴。困ったら依頼するから」

胸ポケットから一枚の紙を取り出し

「ほい」

それを受けとり確認する

「ありがとう」

それは今日初めての笑顔

それを大事そうにバッグにしまう

初めて手に入れた確かな繋がり、それは多分少女にとってかけがえのないものなのだろう

少し胸が痛む

「時に、鈴蘭君の退職金代わりと言っては何だが、君の親は見つけておいた」

「え……？」

門の前に上品で美しい婦人が立っている

丁度彼女が大人になったらあんな風なのだろうか

鈴蘭はその大きな瞳を涙で一杯にしている

「そっくりだな。鈴蘭」

「はい……」

「良かったな。鈴蘭」

「うん……」

「彼女は名古屋河の先代だ。神殺しの呪われた血を嫌い、遠ざけるために、君を捨てたのだそうだ……もっともそんなものはなんの意味もなかったわけだが」

彼女にも、そんな伊織の声が聞こえているのだろう。つらそうに、つらそうに、目を伏せ嗚咽し、我が子を抱き締めようと歩くこともできず。

（家族……か）

こんなにも暖かいものなのだろうか

鈴蘭は母の姿を見て目が焼け付くように熱くなり幾筋も幾筋もの涙を拭いもしない

初めて見た母の姿をその目に焼き付けるように

「よく見ておけ。逃げ出したものの末路を、それは君の母であり僕でもある。」

「ご主人様……」

「行け。悪の組織に聖女のような君は必要ない」

「は……い！」

鈴蘭は歩きだした。そして駆け出し飛び込んだ
帰るべき場所に

□□■■

「良かったのか？」

「何が？」

とぼけるように応える

「ふん、わかりきったことだ。鈴蘭と会うのもこれで最後だろう？
別れの一言くらいあっても良かったのではないか？」

「俺は名刺をあげたからな。いくらでも会う機会はあるだろうよ」

くくくとやはり悪そうに貴瀬は笑い

「あれは偽物だろう」

「……」

ばれてたのか

「あいつはもう闇の世界に来るべきじゃあない。ようやく幸せを掴
めたんだ、これ以上邪魔するわけにはいかないだろ」

そう……彼女には幸せになる権利があるのだ
自分とは違って

鈴蘭は人で
斬識は人でなし

ただそれだけの話
所詮人にはなりきれない
こんなの鬼が人間ごっこをしてるだけだ

「そうだな。例え鈴蘭が泣くとしても、正しい判断だ」

泣く？どうして？

「ククククク、やはり君はいいな
良い悪党になるぞ」

「……誉め言葉として受け取っとくよ」

「それじゃ、また、どこかで」

「ああ、またどこかで」

□□■■
鈴蘭、斬識両名が居なくなった頃、貴瀬は懐でなり始めた携帯電話を取り出す
そのディスプレイに表示された名前を見て嘆息

「翔香か。用件があるなら手短に言え」
《なんだい。冷たいねぇ。あたしがあんたに電話しちゃいけないってのかい》
「僕はこれでも忙しい身でな。」
《悪の組織だからってかい？

御言葉を賜ったよ。よーくお礼を言いなさいってね。お偉いさんが出来ればあんたに直接お目にかかりたいそうだ》
「ふん、そんなことか。有り難く承りましたと伝えてくれ。拝謁は辞退申し上げる
悪の組織なのでな」
《はっ、悪の組織に勇者サマかい。あたしんちの弟(バカ)もそうだけど男ってのは……》
貴瀬は電話の向こうで翔希の姉長谷部翔香がため息をつく様子を思い浮かべつつ

「なんだったら君がでばって来ればよかったのだ。いい加減クソガキに本当の勤め先を教えてやったらいい。なぁ長谷部家“当代”」
《冗談。猫被ってるところを翔希には見せられないよ》
「なんなら、ネコミミでもプレゼントしようか？それをつけて弟に見せてやればいい。僕がけしかけるよりよほど効く」
あちらでこちらがニタニタ笑う姿を思い浮かべたのだろう声のトーンが少し落ちる
《はいはい……それよりあんた。やんちゃも程々にしときなよ。いい加減政府の方がヤバイよ。痺れを切らし始めてる……こちらでフォローするのも限界さね》
「ふん。好きにさせておけ。そんな下らんことより、ネコミミは職場と自宅どちらに送ればいい？いやこの際だ両方に――――」

ぶつり。
つー。つー。

「……なんだあいつは、折角尻尾もつけてやろうと思ったのだが」
そうして自宅か職場かどちらに発送するか悩んでいると

「たぁくん。女の人の声。だれ？」

声にびくりと振り替えるとムッとしたようなみーこが浮いていた
浮かんで移動できるからこそ背後から近付かれると分からないのだ

「君は話を聞いていなかったのか？」
「最後しか聞いてなかったもの。ネコミミなんて誰に送るの？」

むくれたみーこを伊織は無視。館に向け歩き出すとみーこが紐に引かれるようについてくる

「たぁくん。いつまで悪の組織なんて続けるつもり？」
「神殺しというだけで食っていける時代ではないのだ
だから天白家は廃業し、クソガキの長谷部家は剣術道場になった。
今回のような御下命でもなければ僕らが出向くようなカミは、もう殆ど残っていない」
「最も強かった魔人の成れの果て……もしかして私もそうだったのかしら」

やはり伊織はまた無視し歩く

「……ところでたぁくん。斬識くんと鈴蘭ちゃんは？」
「あいつらはクビにしたもういない」
「なんでそんな大事なこと言ってくれないの？私も見送りたかったのに」
「ふん、社員をどう扱おうと僕の勝手だろう
とにかく彼らはもういないのだ。飯を作れ、飯を！」

退場宣告する勢いで館を指差すとすねたみーこは、ふわふわとそちらに向かって行った

「ったく」
「本当によかったとは思っていないはずなの」
いつの間にかとなりにはリップルラップルがいた。
「なんの話だ」
「これを見るの」
少女の手に召喚された金属バットは真ん中で見事に折れていた
先の戦いの最中で壊れてしまったのだ
「新品を、要求するの。ミズノ製じゃなきゃ納得できないの」
はぁ
と貴瀬は嘆息
今度沙穂の剣と一緒に新調してやろう
「全く、金のかかるやつらだ。鈴蘭や斬識の方がまだ使えたぞ」
リップルラップルは、こくこく
「足が速かったの」
「そうだ、どちらも小回りが利いたのだ。そして僕をご主人様、社長と。そう呼んだのがいい。・・・・・わが社が求めているのはそういう人材なのだ」
「手放すには惜しい存在なの。連れ戻すの」
思いもよらぬ言葉に貴瀬はふと視線を降ろした
黒目がちなつぶらな瞳の少女が、こくこく

「悪の組織なの。嘘八百は、当然なの」

「……」

ぽんと手を打った伊織は口の端を持ち上げ、眼鏡をギラリと輝かせた

こうしてまた二人の少年と少女は否応なしに澱の世界へと誘われていく

この決定こそが、世界を変えてしまうことは、今はまだ、知るすべもない

零崎一賊（後書き）

はい天の門終了でございます
駄文ながらここまでお付き合いいただき誠に恐縮でございます
さておき
ここまでいかがだったでしょうか？
面白いと言っていただければ幸いなのですが、残念ながら面白くなかったと言う人も多いと思います
これからはそんな人たちが後半は面白いよといってくれるように頑張りたいです

さてここで突然アンケート気味のなんやらをしたいのですが、ぶっちゃけ沙穂がデレるのを見たい人はどのくらいいるのでしょうか？
感想欄に書いてもらえると嬉しいです
あと普通に感想をいただければ嬉しいです

それでは暫しの別れを当座の華に息災と友愛と、再開を

使い方あってる？

２０１１年８月１３日
午後３：２８分ギュギュットを頬張りながら

～～龍の火、交差する思惑～～（前書き）

なんかサブタイっぽいの付けてみました

それでは原作第二巻一応原作知識なくても分かりやすくしてみました

それではどうぞ

～～龍の火、交差する思惑～～

もう数十分で日付が変わる頃、関東機関運営委員会の議場は異様な静けさを湛えていた
オーバルテーブルを囲んだ財務省の議員並びに官僚たちは、魔人ベルロンドを名乗った男に向けて顔を青ざめていた

「ゼピルムは、この“関東機関”を用いてクーデターを起こす」

彫りの深い、青い瞳の、金髪のそしてゴシックを思わせる壮麗な衣装を纏う、浮世離れした男だった

「ふ、ふざけたことを・・・・・そこを動くな！」

一人が机上のインターホンの呼び出しを押す
だが返事は帰ってくることはない

「な・・・・・こんなときに誰もいないのか！応答しろ！おい！」

愚かな奴だ呼び出しに誰も答えないのを誰もいないのかとは、個人営業の事務所ではないのだ、連絡用のオペレーターが一人や二人、どんな緊急時だろうと残っているに決まっている

ベルロンドは、失笑し指を鳴らす

両開きの重厚なドアを蹴破るように入ってきたのは、軍服にも似た制服に身を包んだ十代後半の少年少女。
手には、短機関銃。腰にはサーベル

関東機関の戦闘員たちはベルロンドの合図から無駄のない動きで議場を制圧した

「こっ……この恩知らずどもがっ……！わかっているのか！これは反逆行為だぞ！こんなことしてただで済むと思っているのか！」しかし、責を問われた機関員……国に拾われた孤児たちはその官僚の声に目をとがらせるだけだった

その代表にと言わんばかりに魔人が告げた

「我々ゼピルムは表舞台に立つための拠点が欲しい。彼らはこの国に恨みを持っている。利害の一致と言うやつさ」

「……それで、今後の予定は？」

中年のスーツ姿が目立つ中まるで場違いなセーラー服姿の少女が一人眼鏡のショートヘアの

議員官僚の中でその少女だけが平然とした顔で挙手している

魔人ベルロンドはその姿に奇異を感じたように眉をそびやかした

「なんだお前は？」

少女はあげていた手をおろして

「あたし局長。ここの」

「ちなみに飛弾真琴っていうの。よろしくゼピルムの魔人さん」

「なるほど……先任の局長の娘か」

ベルロンドは薄い唇で緩い弧をつくって見せた

「予定など聞いてどうする」
「何とかしなくちゃ」
彼女が率いていた関東機関……それは、日本国政府の擁する唯一の対魔機関である
しかし構成員が二百にも満たぬ、弱小組織であることにも違いない
機動隊ならまだ勝てよう。自衛隊なら善戦もできよう
だが
「あたしたちがそんなことを行えば、同じ第三世界の法、神殿協会がだまっちゃいないわ。関東機関が敵うはずないじゃない。クーデターが成功するなんて馬鹿らしい。構成員をむざむざ失うまねはしたくないの」
「いや、可能だ。ここの局長ならば君も知っているだろう？龍撃手（ドラグーン）というものを」
「……！」
真琴は驚きを表面へと出すまいとしたが、それでも眼鏡の下で瞳を少しばかり丸くした
父が研究して、完成しなかったそれ
「私が龍撃手だ。お前の父を殺し、奪った計画書でゼピルムが完成させた」
「あんたが指定十四号なのね？」
「あのときからここではそう呼ばれているらしいな」
ベルロンドは関東機関に指名手配されている事実を鼻で笑う

「だったら待ちなさいよクーデター」
「ほう？」
「だって私のお父さんのお陰でゼピルムの幹部になれたんでしょう？こっちは親を殺されて、チャンスを寄越しなさいよ」
突如わめきだした真琴にベルロンドは最初こそ呆気にとられたが、次には高らかに笑い始める
「いいだろう。気に入ったぞ。権力にしがみつき、ふんぞり返るしか脳のない爺どもとは違うみたいだな。
チャンスを恵んでやる。……では一日だけ待ってやろう」
ベルロンドはマントを翻し、笑い声を響かせながら、機関員らと共に立ち去った

□□■■

しかしながら
「まいったわねー……」
関東機関本部から飛騨邸宅に戻った真琴は自分の部屋のベットで横になった
実はあてにしていたクーデターの非賛同者が賛同者の手によって監禁されていることが判明したのである
「どうする、これから」

その情報と共に逃げおおせた少年は思案顔で言ってきた
ワックスで散らした髪を明るい色に染めた容姿だが、関東機関の精鋭Ｅナンバーのリーダーを勤める彼
父の研究成果の一人で機関のナンバーワンエージェント
コードＥ１の香良洲菊人である

「手がないわけじゃないのよ」

「そんなもんがあるなら早く手配しようぜ」

そうしたいのだけれど

「Ｅナンバー（エリミネート）と呼ばれる関東機関のエージェントはＥ１からＥ９までが選抜されているけど、あんたとＥ２以外全員クーデター側についちゃったから中々ね」

しかもＥ２は監禁されている

「戦力が足りないな」

「そう、だからＥ０を呼びたいのよ」

「っ・・・・・！？」

そう、まだ真琴が局長に就任する以前・・・・・Ｅ０と呼ばれたエージェントがいた

関東機関史上最強
父でさえその能力のすべてを把握できず、神殿協会に『かの地に聖騎士団の逗留は不要』とまで言わしめた男

「生きてんのかよ」

「そうみたいよ」

だけどと続け

「記憶喪失らしいのよ」□□■■

さて行くか

零崎斬識は断頭台を一つ一つ踏みしめるように登る

一段一段

風が笑うように吹き荒れる

何故こんなことになってしまったのか

今さらになってそんな無意味なことを考える。一体何故殺人鬼の自分がこんなところにいるのか。何故いなければならないのか

もう関わらないと決めたのに――――否一度関わればそこに関係が生まれ繋がりが産まれる

それは抗いようもない運命で

それはどうこうできない命運で

仕方ないと言えばそれまでなのだろう

最後の一段をあがりきり顔をあげ周りを見渡す

辺り一面人で埋め尽くされている

その眼差しの行方は当然俺に向けられていた

（・・・・・うぅぅうううう）

もうやだ。何これ何の罰ゲームだよ

しかしいつまでも黙っていれば、話は進まない

きゃーきゃー騒ぐもの
はなから興味のないものじっと見定めてくるもの
期待にこたえなければ
そして重苦しいその口をようやく開けた
「転校生の斬崎(キリサキレイ)零です」

□□■■

時間は少しというか随分前に遡る
東京都某所の裏通りにあるビルの二階に位置する、寂れた事務所
その看板には『人間道』と表記されておりまだ創設されて三年しか
たっていないが、全く掃除をしないため、色褪せたそれは既に老舗
のような荘厳な雰囲気を漂わせている

中に入ると中央にはソファーが二つ、テーブルをはさみ向かい合う
ように並べられている
そして、その片側。丁度備え付けられた、テレビがよく見える方に
座り手に汗を握っている少年がいる

その事務所の中は今日も今日とて騒がしくなっていた

「っしゃーーーーっ！！サヨナラ3ランキターーーーーッ！！！
流石小久保の兄貴だぜ。そこに痺れる憧れるぅッ！！」

ホークスファンである

さておき
それはぴったり、狙いすましたような０時００分のことだった
２３時５０分事務所に備え付けたバスルームから空調の聞いた仕事場に行き、デスクのニトリで買った椅子に深々と腰かけ近くにあった雑誌を手に取る

また円高が進んでるよ

経済紙のようである

意外と多趣味、そこが売りの殺人鬼です
そして雑誌の５ページ目を開けた時である

（・・・・・負債総額は確かに高いが、ほとんどは自国民からの国債・・・・もうしばらくは大丈夫かな？）

突然
ずががががが！！

銃撃の嵐
一瞬にして扉がぶっ飛び、中にある家庭用品が全ておしゃかになる
そんな中素早い動きで射線の外に飛び込んだのはさすがなのだろう

「あーやだやだ。こんな真夜中に。一体誰だ？齋藤さんか？いや・・・・あの人にしてはやり口が派手すぎるか」

だとしたら一体・・・・・

ずがががががが

考える暇もなく第二射
砕牙を取りにいきたいが、バスルームに置きっぱにしてしまった
ここから取りにいけば確実に蜂の巣だろう
次の弾切れの時が勝負か
瞬間銃撃がピタリと止まる
そして走り出そうと腰を浮かしたその時
握りこぶしサイズの黒い塊が二つ窓から投げ込まれた
（手榴ｄ……！？）
ソファーを咄嗟に倒し爆風と破片への対策をとるが
ボンッ
と爆発したそれからは爆風や破片は飛び散らず、かわりに白い硝煙が立ち込める
（これは……催涙ガスか）
しかし、催涙ガスなどその気になれば１５分は息を止められていられる斬識に有効な作戦とは言えない
よし、砕牙を取りに
さらに、しかし

それは敵わない

ぐらっ

斬識の視界が揺れる

（……え？）

急な睡魔に、膝から崩れる

（催涙ガスは吸ってないはず……）

身体を動かそうと思う気持ちさえ徐々に薄れていく

そんな中シスター服姿のモーゼルを携帯した女が既に原型を残していない入り口から堂々と入ってくる

「ちゃーす。かちこみっすう。まあ、もう意識はないと思いますけど……」

（こいつ！？神殿協会の！？）

「あれ？まだ意識があったんすか。さすがっすね。でもまあそれも時間の問題でしょうけど。
すごい効きめだったでしょう。これ？
きっと息を止めたんでしょうけれど無駄っすよ。これは技術開発部が新開発した、催涙弾でなんと肌から成分が浸透して、血液から吸収された成分が脳に直接作用されるって代物らしいっすから」

言い終わる頃、既に斬識の意識はなかった

□□■■

目を覚ますとそこは車の中だった6人乗りのワンボックスカーだった
運転席を見ると神殿協会特有のシスター服姿の女性が鼻歌交じりに
運転している

そしてその真後ろに荘厳な鎧に身を包んだ聖騎士
ちなみに斬識はその隣

さらにその後ろには白地に金糸の入った衣装、銀灰色の髪、色白で
細面の青年がいた

最初に動こうと試みたが縄で縛られ動けない
さらに猿轡を装着させられており喋ることすらままならない

「お目覚めになりましたか？」

白地に金糸の入った衣装、銀灰色の髪、色白で細面の青年――フ
ェリオールが斬識の様子に気付いた

だが、話すことは出来ないので目だけで訴える

「あはははは！そりゃないっすよフェリオール司教
開発部の奴らが一度吸ったら八時間は目覚めないって言ってたので、
あと・・・・・五時間ってところっすよ」

「やはり、規格外なひとですね・・・・・」

ふと気になって外を見てみると、まだ暗い
陽が登ってないのを見ると恐らくあれから、まだ数時間くらいしか経っていないのだろう
猿轡を外そうともがいていると隣の聖騎士がガントレット、日本風に言えば籠手と言うべきか外して、その血豆や傷で汚くなった手で猿轡を外す
「っは。一体なんだこりゃあ！説明を即座即決早急に要求させてもらう！」
「もう、起きたっすか！こりゃ、ハコさんが聞いたら驚くこと間違いなしっすね」
「他人（ひと）の事務所を穴だらけにしといて言うことはそれだけか」
「すみませんでしたね、斬識さん。彼女にやり方は任せると言ったらこんなことになってしまって」
「修理費は出るんだよな。出してくれるんだよな？」
「「……」」
「おい、目を見ろ。そらすな」
頼むから
いや、本当。切実に
最近依頼が無くて

「ま、そんなことはともかく、私達は貴方に依頼があって来たんですよ」

俺に？

□□■■

連れてこられたのはマリア教系列の小さな協会
入り口のドアに彫られた天使のノーズアートと、群青色に白い十字を抜かれた絵が神殿協会と関係があることを示している

中に入りさらに地下
拷問でもされるのだろうかと頭をよぎったが、既に拘束は解かれているためそれはまずないだろう

体感からして地上から１０ｍほど階段で降りたところに部屋があった

洋風の空調が行き届いている広い部屋だった

「どうぞ、そこに腰かけてください」

フェリオールが椅子をひいた所に大人しく座る

そしつフェリオールが向かい合うように座り
クラリカはその後ろに立ちモーゼルをいじり始めた

「どうぞ」

「あ、どうもです」

ここまで、沈黙を保ち続けていた聖騎士が紅茶を慣れた手つきで運んでくる
その貯金ここで使うのかよ
てゆうか、意外といい人？

「さて、早速本題へと入りたいのですが、先日からの騒動で既に知っているとは思いますが、ランディルがゼピルムと繋がっていました」

「はぁ」

そういえばそんなこといってたような気がしないでもないでもないようは、忘れた

「前回ランディルは最後に鈴蘭さんをさらい、ゼピルムに連れていくようでした。まあ、貴方にそれは阻まれたわけですが
しかし、どのような目的でこんなことをしてるかはわかりませんがこれからも鈴蘭さんが拐われたりしないという可能性は高くないかもしれません。ですが、神殿協会のほうも決して人員が余ってるわけでもありませんし、相手は魔人です。もしまたランディルクラスの強敵が来たら聖騎士だけでは太刀打ち出来ないでしょう
そこで貴方に白羽の矢がたったというわけです」

「俺に、鈴蘭を守れと」

「ま、簡潔にいうとそうですね」

成る程

フェリオールの言い分もわからなくはない。確かに相手は魔人なんて未知な存在、中途半端な人材を数人派遣するよりも、実績のある俺を選ぶほうがいいに決まっている

でも

「お断りさせていただきます」

フェリオールは少し驚く

「一応、理由を聞いておきましょうか」

「いやいや、そんなことわかりきってるでしょう。俺は殺人鬼です。護るための戦いには向きませんし、それに俺が共にいるほうがよっぽど危険です」

いつ、俺が殺してしまうとも限らないだろう？

「ふーむ、日当だいたい二万円の仕事なんですけど」

金でつろうと言うのか？浅はかな

フェリオールのその言葉に反応したのは斬識ではなくクラリカだった

「フェリオール司教！何をいってるっすか！信者達からの大事な大事なお布施をこんな奴に渡すなんて……」

「クラリカ。黙りなさい。これもきっと神の思し召しです」

「……そんな」

「勝手に話を進めないでください。俺はそんな話を了承した覚えはありません、お金で何でも解決できると思わないでください」

信念は金じゃ買えんよ

「そんなこと言わないでください。あなたが適任なんですよ」

「何回いっても同じです」

「そうですか。残念です、サポート兼メイドとしてクラリカをそちらに寄越そうと思ったのですが」

は？は？ハ？ＨＡ？

「なーにいってるっすかぁ！フェリオール司教。そんなの聞いてないっすよ！？」

「勿論メイド服だよな？」

「無論です」

「俺を呼ぶときは？」

「メイドならやはりご主人様でしょうね」

（・・・・・そうか）

うん

「義を見てせざるは勇なきなり。あなたのその信心深さと人に対する思いやりには負けました。不肖零崎斬識、その任務全身全霊をかけて遂行させてもらいましょう」

□□■■

零崎斬識との交渉が成功し彼を聖騎士に車でホテル送らせた後フェリオールはまだ温かい紅茶を啜っていた

「フェリオール司教！あれはマジにマジっすか！？」

クラリカが物凄い剣幕でフェリオールに迫る

「何をいってるんですか？大丈夫ですよ。いざとなったら、協会を倒壊させたことをたてに、踏み倒せばいいのですよ」

今時日当2万の仕事なんて甘い話があるものか

「いや……そっちじゃなくて、メイドの件についてなんすけど」

「……」

紅茶を一口飲み

「え？」

「やっぱり本気だったんすかぁ！？」

うわぁぁあんんん

と泣きながらクラリカ外へと飛び出していった

「若いですねぇ」

ふぅ

と一息つく司教でした

そして後日斬識宅には二着の制服が送られることになった

□□■■

私立開栄高校
県下有数の進学校であると同時に体育会系の部活動でも、県内外に名を馳せる名門高校である。

「皆さん、おはようございます。いよいよ今日から新年度です」

冬からこの春にかけて急に生え際がハゲ際へそしてハゲになった校長がネクタイを締め直しながら喋る
春の揚々たる日差しも助長してるのだろうかその堂々たる声は、生徒達を深き深淵へと誘っている

（もう、一ヶ月も経つのかぁ……）

二年生の列に交ざって青空を仰ぐ名護屋河鈴蘭は、その一ヶ月あまり前に東京で起きた“爆発事故”の当事者の一人であった

当初はテレビで名前を出されたこともあり学校の生徒たちから好奇と関心を集めたが、それもしばらくは続かなかった

今ではテレビでも既に神殿協会のことはほとんど流されなくなった
翔希先輩曰く神殿協会がテレビに圧力をかけているせいでもあるらしいが

（にゃ～ん。鈴蘭起きてる～？）

自分と相手にしか聞こえないよう器用に喋りかけてきたのはたかぎよしこ
長い髪をピンクのリボンでツインテールにして眼鏡もこれまたピンクの少女だった
皆からはカギカッコ略してカッコという愛称で親しまれている子だ
カッコは入学当初からの親友で、当時私が自分の身の上話をしたら

『スゴイスゴイ、それって悲劇のヒロインじゃん！』

と思いもよらぬ回答がきた
普通この話をすると大抵腫れものに触るような扱いをされるのだが、
彼女だけはそんなことはなかった

いつも賑やかなこの子がいてくれたお陰で、一年生の時間を楽しく過ごすことができた。いや、小中学校と比べればずっと

だから親友

（なに？用なら後にした方がいいよ。ゆでだこの田野がこっちみてるし）

ゆでだこの田野
由来はいつも怒って顔が真っ赤だからである
某高校教師でいつも理不尽に怒り女子にだけ甘く、朝会時スカート丈の話を一時間続ける糞教師で下の下
下劣の極み、ゲスの頂点と作者が呼んでるのは秘密である
決して筆者の母校の体育教師とは毛ほども関係はない
決して筆者の元担任とは関係が無いものである

大事なことなので二回言いました

（少しくらいなら大丈夫大丈夫。なんと今年度は新しい先生と転校生が来るらしいよ
しかも外国からの帰国子女だって）

（へぇ）

そうか転校生が。ならもし同じクラスになったら優しくしてあげよう。
私がそうやって救われたから
今度は私が救う番

「……それでは、私の話は以上です。
では最初に新しく、皆さんと学園生活を共に行う生徒と本人たちの希望により先生を一緒にご紹介いたしましょう」

先生と生徒を同時に？本人たちの希望で？珍しいこともあるものだ

ふときになり壇上を自然と目で追った壇に上がってきたのは二人の男

一人は小洒落たジャケットにスラックス。切れ長の目を角ばった銀縁眼鏡に覆った若者
一人はエンジ色の地味な開栄高校の制服が似合わない身長が高めの好青年

だらだらだら

嫌な汗が止まらない

これは一体何の冗談だ？

「初めまして皆さん転校生の斬崎零（キリサキレイ）です」

「初めまして皆さん貴瀬伊織と言います」

「何でだあああああああああああああっ！？」

そんな言葉でしか鈴蘭は驚きを表すことができなかった

「はっはっはっ。いやぁ元気のいい生徒さんですねぇ」

「賑やかで楽しそうな学校ですね」

静まり返った校庭にクスクスと笑いがやや起こる

え、だってもう会わない見たいな雰囲気だったのに

鈴蘭は忘れていた

彼と初めてあった時の第一声を

『悪の組織だ』

□□■■

（無茶苦茶だわ……）

全校集会が終わり生徒達が校舎へ向かうなか、真琴は呆然と突っ立っていることしか出来なかった

ＥＯと推測される男伊織貴瀬は世を忍ぶ神殺しだがあろうことか真っ向から教師として潜入して来た

そしてもう一人
伊織貴瀬の隣で笑顔を振り撒いていた少年
何時だったか、そう確か関東機関の横の繋がりを強くするために色んな、日本の要所要所を訪問してた時のことだ

確か久渚機関の――――そう確か《肆屍》――――だったか、挨拶に行った時そこにいた、次期《肆屍》の室長と噂高い子供（私にはただのガキにしか見えなかったけれど）に渡された写真の人物に瓜二つなのだ
そう、確か《零崎》と言ったか
会ったら知らせろと、決して接触せずに一報を寄越せと

『危険ですので』

そのとまだ声変わりもしていない幼い音が耳にまだ残っている

《政治力の世界》に置いてこの世界を牛耳る、久渚機関に要注意されるほどの人物

一体何者？
そんな言い知れもしない不安が胸に刺さる

（考えても仕方ない）

真琴は気を取り直して小さく小さく呟いた

「目標発見。あとよろしくね」
《了解》

ごく質素なイヤリングから菊人の声が聞こえてきた

□□■■□□■■

朝会から教室に戻って最初の休み時間
まるでこのクラスに有名人の一人でも押し掛けてきたかのように、
転校生を取り囲んで質問攻めにしている

「どこ生まれ？」
「フランスってどんなところ？」
「どうして、今日本に？」「貴瀬先生とはどんな関係なの！？ハァハァ」

本当にとりとめのないどうでもいいことから、核心をつくような質問まで様々だった
最後のには答えることはよしたみたいだけれど（これだから腐女子は）

「み、皆さん落ち着いて……」

本当に珍しく斬識は狼狽えていた。その反応が可愛く少しからかいたくなってくる

「好きなタイプは？」

本当に軽く
鈴蘭は群衆の外からひょいと投げ掛けるように聞いてみた
しかし、それはクリーンヒット

「メイド！！！」

「「「……」」」

バンッ

と机を叩き躍り出るかのように勢いよく立ち上がり彼は言った

ドン引き

満ち潮から引き潮

斬識は自分の失言に気付き

「……め、冥土にまで付き添ってくれるような一途な人かな」

苦しかった

見苦しかった

聞き苦しかった

いや、苦々しいかな？

しかし、やはり腐ってもイケメン

その笑顔は周囲を欺く

……なんだ聞き間違いか

そんなことあり得ないよね

と広がっていく

ちょうどその時放送がなる

『二年A組の名護屋河鈴蘭くん。後で美術準備室へ零――斬崎零

くんを連れて来なさい』

□□■■

そして休み時間鈴蘭はやつのいる美術室へ斬識と共に向かう

「それで斬識くんどうしてこの学校に？」

あくまで小さな声で、周りに聞こえないように話す

「いや、話せば長くなるから、また今度話そうか」

「また、私のことじゃないよね？」

恐る恐るという感じで聞いてくる

ま、わざわざ混乱させる必要もないか

「違うよ」

「なら、いいや」

危険な目にあうのかはまだ謎だし学校生活を楽しんでもらうとしよう

「ところで、貰ったメイシの電話番号、かからなかったんだけど」

ぎくり

「電話番号を打ち間違えてないか、何度もかけたんだけど」

ぎくりぎくり

「市役所に行って、最近そこで引っ越した人がいないか聞いたんだけど」

「……」

オーラが
ランディル以上の重圧がのし掛かる
さて
ダッ！↑駆け出す音
がしっ！↑襟を捕まれた音
ぶんぶん！↑振りほどこうともがく音
ボコスカ！↑右フックからの蹴り

彼らは今日も平和だった

□□■■

「名護屋河です……」
「斬崎です……」

美術室の引き戸式のドアをゆっくり開くとそこには灰色の回転式の椅子にふんぞり返っている貴瀬伊織――否伊織貴瀬がそこにいた

「ようこそ、美術室へ」

相も変わらずいやらしい、人を小馬鹿にした顔でこちらを見る

「ふむ、どうして斬識がぼろぼろになっているのかは気になるが、まあいい。本題に入らせてもらおうか」

くすんだ絵の具の匂い
小物が雑多な窮屈な室にて貴瀬と向き合うようにパイプ椅子がもうひとつ
「まぁ掛けたまえ」
端正な顔に似合う爽やかな笑顔で席をすすめられ座る鈴蘭
ホームルームでの彼に対するクラスの評価は容姿端麗で気さくな教師ということですこぶるいいようだった
「あの……」
「僕のことはただ尊敬の一念で貴瀬先生と呼べ」
にたりと本性の彼が笑う
（あぁぁ……本物だぁ）
「どうしたのかな、名護屋河クン？泣きながら震えだしたりして。ああ勿論今までどおり御主人様と呼んでも構わん」
「……。……で、あの。何のようですか？わざわざ斬識くんまで呼び出して」
「進路相談に決まっているだろう」
咄嗟にドアに向かって鈴蘭は走り出す
だが、ドクターに強化された鈴蘭と言えど、斬識には及ばず捕まる
「離して斬識くん！私の人生は私の人生はぁぁあああ！

まさか、このために斬識くんを呼んだの！？」

悲惨、南無

「知らん。今回斬識は俺が呼んだわけではない。
たまたまいたから、使ったまでだ」

「あのですね、私、まだ二年生になったばかりで」どんっ
と鈴蘭の言葉を無視して一枚の紙切れをテーブルに広げた

『伊織魔殺商会入社契約書』

もう内定は確定してるようだった

「嫌ですっ！誰が入るかあんな会社っ！大体この『業務内容によって生ずる怪我もしくは死亡に関して一切の不満は申し立てません』とか『事業主を御主人様と呼びしたって止みません』とかワケわかるかぁっ！！」

「ほう君は教師に向かってそんな口の聞き方をする生徒なのか」

彼我の立場を誇張する表現に鈴蘭は一抹の不安を覚える

教師と生徒

「・・・・・先生教育委員会と言うものを知ってますか？」
「ほう、君は僕を馬鹿にしているのか？」
「えへへぇ。そういうことです。不当な扱いをすれば・・・・・即時訴えますからね！」

「そうか、君は……ここの県教委の委員長の弱味を握ってるか？」
「え……？」
「まさか君は女子高生でありながら日本国首相と知り合いなのか？」
「……いえ」

鈴蘭の完敗
大人の人脈の勝利

「あと体の中の自爆……」
「おい、自爆ってなんだ！？そんなこと聞いてないぞ」
「はっはっは、ここはい～い会社だぞ？」
「は～ぐらか～すな～！」

やはりここでも鈴蘭はあの言葉を思い出すのだった

『悪の組織だ』

男は辛いよ

さて、と

斬識はあの美術室で貴瀬鈴蘭と別れ、学校の中を探検していた
いや、授業が面倒くさいとかそういう問題ではなく

（いざというときに、動けないのはごめんだからな）

そう、神殿協会の言う通り、魔人がここまで来てしまった場合、敢えて逃げるという手段を選ぶ場合、道がわからないじゃ困る
そう思ったのだが

（……時間の無駄か）

ありきたりの、四階建ての少し一般校舎より大きいか大きくないか、くらいの
特に気になる場所もない

特徴があるとしたら、スポーツでその名を轟かせているだけあって、陸上用のトラックは広く他にも、トレーニングルームの整備が良いことくらいだろう
そして保健室で時間を潰すために廊下を歩いていると

「うぉ～これがジャパニーズスクールっすかぁ。随分小さいっすねぇ」

声が聞こえた
その主は燕色のセーラー服を着こんで、変装をしているが、癖ッ毛

のそれは誤魔化せない

「……何してるんすか？クラリカさん」

「お！斬識さんじゃないっすか。今は授業中ですけどどうしたんすか？」

それはこっちの台詞なんだけれど

「見回りですよ。逃走経路の確保と、狙撃ポイントや、防火シャッター、死角に空き教室をあらかじめ把握しておこうってことで」ま、大した成果は何もなかったけれど

「意外と斬識さん仕事は真面目にこなすタイプっすか」

「そりゃ、メイドの件をを破棄されたら困りますから」

「……そうっすか（・ω・）」

この依頼だけは徹頭徹尾、一から百まで完遂して見せる！！！

「ところでクラリカさんはどうしてここに？」

「私も同じっすよ。流石に斬識さんでも女子更衣室や、トイレにまではついていけないでしょう？ま、そういうわけっす」

ふむ、フェリオールは中々気が利くようだ

誉めてつかわす

いや、でも

「少し残念なように感じるのは気のせいかな……」

「は？」

「いや、別に――」

女子更衣室

女子トイレ

なんと甘美な

「――女子更衣室の中でＪＫ達とキャッキャワイワイして仲良くなって休み時間に女子トイレでなんて――微塵たりとも考えてないから！」

僕のお口はおしゃべりさん

てへ

ペロ

怖いね欲望って

「依頼する人間を間違った気がするっす……」

「それを言うなら、そっちこそ授業くらい出ないと怪しまれますよ？」

「大丈夫っすよ。だるいって言えば、休ませてくれるなんて、日本は温いっすね……」

いつも明るい彼女に影がよぎったのは気のせいだろうか？

まあ、スルーするという方向で

「それに関しては同感ですね。教育機関のくせに生徒にいいように振り回されるなんてちゃんちゃらおかしいですよ」

「まあ、戦時中みたいに偏った教育もどうかとは思いますけどね」

「要は、バランスってことですね」

「そういうことっす」

「「仕事と休憩も同じこと」」

要はサボりってことっす

「お互い大変っすねぇ！！」

「有給でもとって飲み明かしますか！？」

あはははははは

二つの声がこだまする

傷の舐め合い

大人たちの友情

そして、突然斬識の内ポケットに入っていたケータイが鳴った

□□■■

あらかじめ用意しておいたフィアット５００に二人は乗り込んだ

「運転は頼みますよクラリカさん」
「了解っす」鍵を受け取りエンジンの爆発音が轟き車はあり得ない加速度で進む
おそらく改造車なのだろう

「それにしたって、どうしてわかったんすか？鈴蘭さんが校舎の外に出たこと」
「大したことはありませんよ。彼女の胸元のスカーフに発信器と超小型のＣＣＤカメラをつけといただけです。ある一定の距離から離れるとアラームがなるようにね」

斬識は鈴蘭の居場所が光の点で映し出されているケータイを見せる

「映像と発信器を照らし合わせると……あれですね。約２０ｍ先のダイムラー・ダブルシックスあれをつけてください」
「……抜け目がない人っすね」
「備えあれば憂いなし、ですよ
心配性なだけです」
「本当にそれだけっすか？」

それだけって

「意図がよくつかめないのですが」
「いや、何でもなかったっす……忘れてください」

クラリカはハンドルを右に回しながら言う
そして、しばらくして

「少し聞きたいことがあったんですけど、今いいっすか？」
クラリカがらしくもない感じで聞いてくる

「その……なんすか。鈴蘭さんとは一体どういうご関係なのかと」
はい？と斬識は頭の上にはてなを浮かべた
「どういう、と言われましても……」
知り合いと言うにはあまりにお互いを知らないし
友達と言うには付き合いも浅い
ましてや恋人なわけでもあるまいし

「正直言って、異常っすよ、あなたは。調べさせてもらいましたが、あの時のあなたは鈴蘭さんと知り合ってまださほど経ってませんでしたよね。どうしてそんな見ず知らずの人のためにランディルと戦ったんすか？」
斬識が死ぬ危険性が全くなかったわけではないのだ。命をかけて少女を救うなどそんなリスクを背負う必要などどこにもなかったのに
少年はあの場に来た
来て助け出した
その、理由

「……あえて言うなら主義ですよ」
「主義？」
「ええ。あくまでもあえてですが」

「そうっすか」
クラリカは一人で納得して
「じゃあ、私にもチャンスはあるってことっすね」
「チャンス？」
「こっちの話っすよ」

結局、斬識には彼女が何を言いたかったのかわからずじまいであった

「それにしても、どこに向かってるんすかねぇ」
鈴蘭を乗せた車は未だ目的地につかない
「この方向・・・・・もしかして、伊織家かもしれないです」
「あの悪党の家っすか！？」
「おそらくですけど」
「先回りするっすか？」
「いや、確証はありませんから、このまま尾行したほうが確実でしょう」

楽しげにクラリカはアクセルを踏んだ

□□■■

結局ついたのは伊織家の屋敷だった
鈴蘭と伊織貴瀬、リップルラップル、長谷部・・・・・うん、に加えセーラー服をきた少女が車から降り中へと入ったのを確認して門の前に駐車した

「前にも侵入しましたけど随分とでっかい屋敷っすよねぇ」
「鈴蘭いわく、ディズニーランドの約半分の広さがあるそうですよ」

そんな大量な資金どこから出ているのか
悪の組織ってのも伊達ではないらしい

門を乗り越え、中に侵入する
発信器をつけておいて正解だった。この広い屋敷の中を探しだすのは難しかっただろう

「自分のほうも・・・・・質問していいですか？」
斬識はそう切り出した

「？……ええ、まあ答えられることなら」
「スリーサイ……」

カチャ

「や、やだなぁクラリカさん。なんで俺にモーゼルの銃口を向けてるんですか？」
「額(ひたい)で煙草を吸うこつ教えてやるっす」
「すいません。おふざけが過ぎました」

閑話休題

「なんで、こんな危険な仕事を？」
彼女がそれほど信心深そうには見えないし、本来こういうことに女性は向かないのだ、男性に比べ体力が落ちる上に筋力も劣るなら、理由があると考えるべきだろう

「……」
「いや、言いたくないのならいいんですけど」
「……復讐」
「え？」

今なんて
急にクラリカさんの雰囲気が変わった気がした

「いや、そんな大した理由じゃないっすよ
ただ小さい頃、魔人に襲われたところをフェリオール司教に助けられたってだけっす。ま、恩返しと、その時に助けてくれた主に感謝してるんすよ」
次の瞬間にはいつもの彼女に戻っていた

「……」
「さ、早く行きましょう」
斬識の手を引いたクラリカはどこか悲しそうに見えた

□□■■

「それで、斬識さん。発信器をつけたんじゃ……」
「おっかしいですねぇ……」
愛想笑いで誤魔化してみたり

「確かに、発信器はこの位置で反応してるんですけど」
「故障っすかねぇ」
「いやいや、そんなはずは」

仕事前に点検したんだけど
「でも翔希さんもいたんでしょう？なら大丈夫ですよ。あれでも勇者っすから
ほら、近くに出来たカヘェにでもいかないっすか？」
「いや、あいつじゃ、不安ですよ
将来性は認めますが、今はまだまだです」

今鈴蘭が狙われたら危険だ
急いで、故障がないか調べ始める

「……」

バキャ

そして地面に置いたアンテナ代わりの機械をクラリカがふんずける
「――なにするんですかぁっ！？」
「そんなポンコツ直す必要ないっすよ！」
「だからって壊すな！直せば、位置がわかるだろーが！！」

これ三万もしたんだぞ

「耳を澄ましてみるっす」
「耳？」
仕方無く耳を澄ましてみると、わずかな地鳴りが聞こえた

「地下か」
「その通りっす」
ぷいっと踵を返す

「何を怒ってるんですか、クラリカさん？」
「別にそんなことないっすよ、結局鈴蘭さんのことが心配なのかなんてこれっぽっちも思ってませんよ」
「どういうことですか」
「自分で考えてみることっすね」
考えるといっても、鈴蘭を守るのが自分の仕事なんですが

「だからどこ行くんですか？」
「入口を探しにに決まってるでしょう。モタモタしてると追い付けなくなるっすよ」
「その必要はありませんよ」

それを聞いてクラリカは足を止めた

「へ？」

瞬間、斬識は《砕牙》を抜いた

轟音

思い切り地面に叩きつけた

「ショートカットです！」

「マジっすかぁぁあああ！！」

クラリカの声は地下にこだました

■■□□

「今、何か聞こえませんでしたか？」

すでにホコリだらけの開栄高校の指定セーラー服を着た鈴蘭が薄暗いダンジョンの中で呟いた

「気のせいなの、ここではよくあることなの。」

てくてくと、鈴蘭に反して小綺麗なままのリップルラップルが歩く

「ねぇ、長谷部くん。あの宝箱調べてきてよ」

翔希に命令を下したのは、関東機関現指揮官の飛騨真琴だった

「なんで、俺がそんなこと・・・・・」

「あれが、神器だったらどうすんのよ」

「なら自分で行けよ」

「あら、学校の成績がどうなってもいいのかしら」

「ちっっくしょーーー！！」
飛騨真琴
関東機関指揮官であり開栄高校理事長の孫娘である
勇者と言えども、いち生徒なのであった
「いっでぇぇぇええ！！やっぱりフェイクじゃあねぇか！」
使えない勇者ね
と真琴はぼやく
「ねぇ、地下に神器とかなんかないの？」
隣を歩く、伊織に真琴は尋ねるが案の定
「だから、知らんと言っているだろう」
彼曰く、家主である彼さえも地下を把握しておらず、魔物や建物の建築年数などからあまり詳しく調査はしていなかったのだ
しかし、ないでは困るのだ。便りにしていたＥＯ――伊織貴瀬が記憶喪失から戻る気配はない上に今の戦力ではゼピルムの魔人には勝てない
関東機関を取り戻せない
「こうなったら、鈴蘭を譲り渡して交渉材料にしようかしら」
「いやぁぁあああ！スライムがスライムがぁぁあああ！！」
スライムに負ける魔王候補か
「あっひぁ！背中にはいっ！ひぁぁあああ冷たひぃぃ！あっそんなとこダメぇぇ／／／」
（……）

交渉材料になるのかしら？
そんなときケータイがなった
「なに？菊人」
『少し不味いことになった』

普段真面目な彼は口調と声高で危険度がわかる
つまり、本当に不味い

「どうしたの？」
『お前の言ってた、転校生の『零崎』ってやつがそっちにいったぞ』
「っ！？」

なんで？私たちを追ってきたの？
まさか、“彼も”ゼピルムの追って？
いいえも知れぬ不安ばかりが真琴の中に広がる

「なんで、足止めしなかったのよ、役立たず！」

菊人はよくやってくれている。そんなことは知っているが言わずにはいられなかった

『しょうがねぇだろ。神殿協会のシスターが一緒にいたんだから』

神殿協会？一体なにがどうなって……
いや、神殿協会と一緒なら少なくともゼピルムということはないか

「菊人はそのまま待機。なにかあったら頼むわよ」
『……了解』

次回に続く！

男は辛いよ（後書き）

やっちまった
どうしてこうなった
オワタｗｗｗｗ

これがこの話を書いた感想です
いや、まあ深夜のテンションで書いた話でしたので
でもこれも自分が頑張った証なので消さずに投稿しようかと
そして中々続きが書けなかったので取り敢えずここまでです
ではまた次話で

裏切り者

『……そうか。伊織家には辿り着いたか』
『勇者と魔王候補が同行している
それと『零崎』のやろうもだ』
「問題はない。君は言われた通りに行動すればいいのだ」
『確認したいんだが、伊織貴瀬ってのは本当に……』
「言われた通りにと言った筈だ」
ベルロンドは取り合う気もなく吐き捨てた
「怖じ気づいたのか」
『別に、報告は以上だ』
通信を終え、静寂が部屋を支配する
すべての壁面を覆い隠すほどに並べられたスチール棚には、関東機関の擁するエージェントの各種データが納められている

「ふん、人間とは愚かな生き物よ」

生まれながらに一切の力を持たぬ生き物は、積み重ねによってのみ力を得ていく。例え一生を費やし次の世代に次がれ莫大な年月を費やしても今もなお、魔人のそれには及ばぬのに
挙げ句その技術が魔人の手に渡ると言うのなら、滑稽だ
龍撃手（ドラグーン）
人間はもはや種を賭しても魔人にはかなわない

「調子はどうだい？ベルロンドさん」

間違った怪傑ゾロのかっこうをしたロングヘアの少女が、忽然と姿を現した
マントに、つばの広い羽根つき帽子、ロングブーツの黒ずくめはい

いとして……白い太腿が露なミニスカートが間違っている
「上々ですよ。今のところはとくに、問題といった問題はありませんね。」
「ふーん、退屈だね」
「失言ですよ。ヴィゼータ様」
言葉とは裏腹に愉快げな口調に猫のような悪戯っぽい瞳なヴィゼータはベルロンドに向き直り
「ほら、これ」
一枚の書類を、ベルロンドへ渡す
「……これは、何でしょうか？いえ、聞き直します。これはどういうことですか？」
「さあてね。何がどうしたかも、現段階では謎。どうしたもこうしたも、答えが出てないんだから。でもあえて言うなら、ゼピルムにさえ全くの痕跡を掴ませず、裏で動いてる、何者かがいるってところだよ」
「やはり神殿協会でしょうか？」
ベルロンドはわかりきりながらも、適当に言ってみた
「ノンノンノン、神殿協会のやつらじゃここまでの隠密は不可能だろうね。というか、人間には不可能に近いね」
「では、内部での裏切り？」
「むしろ、そっちの方が可能性は低いだろうね。魔人にこんな精密な作業不可能だ」
「では、一体何者？」
ベルロンドは考え込むがヴィゼータは気をきかしたのか
「ああ、君は心配しなくてもいいよ。答えを知ってればと思って聞いただけだから、それよりしっかりクーデターしてね？ドラグーンの実践テストもかねて。成功すればあなたも今日からゼピルム最高幹部！」
ベルロンドに彼女は笑った

『異界の徒（アウター）』に属する魔人
ゼピルムの最高幹部の一人である

□□■■

数メートルほど積み重なった瓦礫の山から二人の人間が這い出てきた
「派手なのは好きっすけど、せめて言ってからやってください・・・・・」
「自分も今少し後悔してるところですよ」

土や埃を手で払いながら立ち上がる
頭上を見上げると穴の向こうにもうひとつ穴が見えた
恐らく地下一階もぶち抜いてここは地下二階なのだろう
「ま、時間を短縮出来たことは間違いありませんよ」
「残りの寿命も短縮しましたけど」
言葉だけ聞くと呆れているように聞こえるが、その口角は高くつり上がっていた
貴瀬がイカれと呼ぶだけあって、この程度の荒れごとは日常茶飯事なのだろう
「殺人鬼とシスターのパーティー、ですか。なんとなくバランスが悪い気がしますけど」
あちらこちらから感じる殺気に対し《砕牙》に手をかける
「そこは経験と気合いでカバーっすよ」
クラリカも同じく、モーゼルを構えた

□□■■

（地下に潜ってやがんのか・・・・・）

車のボンネットに腰掛けた菊人はくわえタバコのまま、手にした小型のナビゲーターを見下ろす
真琴につけさせた小型通信機はしっかりと本来の仕事を行っていた
（そろそろ追うか）
これ以上地下に行かれて電波が届かなくなるのはさすがにまずい
菊人はトランクから短機関銃を取り出すと肩から下げ、サーベルを片手に持つ
そして短くなった紙巻き煙草を吐き捨て、足で踏みにじる
「いかんぞ、少年よ」「！？」
いつの間に後ろを取られた！？
背後からの声に菊人は銃を構えて咄嗟に振り返った
そこにいたのは骸骨のモンスター、スケルトンだった
が
「少年よ。感心せんな。煙草のポイ捨てはマナー違反だ。紳士はマナーを大切にするものだよ」
菊人のよく知るスケルトンはしゃべることはない
それどころか、パリパリに糊の利いたタキシードを着てステッキを持ち、シルクの蝶ネクタイを締め
葉巻をくわえている
まるで少し前の英国の紳士だ

「一体……てめえはなんだ」
「リッチと言う」
そして彼はステッキで一度地面を叩き
「ミスター・リッチと人は呼ぶがね」
そう言って彼はニヒルに笑って見えた
（リッチ……成金か。まさか死霊使いのリッチってことは）
「ふむ。よい勘をしている。少年」
心を読まれた……！？
「そう警戒するな。私は少し注意をしに来ただけなのだから。しか

しまあ……戦いたいのであればそれには及ばないがね」
スケルトンの魔力が急激に溢れ上がる
まるで間欠泉から留めなく溢れ出す湯水のように
底知れないほどの魔力の奔流

「っ！？」

こいつ……やる気か！？
菊人は瞬時に戦闘体制に入る
「まあ、一度捨てたものを拾うと言うのもなにかと抵抗があるだろう」
リッチがステッキの先端を菊人が捨てた吸い殻に当てると次にはドロリと溶けて無くなっていた
「煙草は灰皿に。くずはくずかごに、死体は墓場に。わかるかな、少年？」
「あ、ああ」
「よろしい」
満足気に骸骨は頷く
「ならば死体はさておきクズにはならないことだ。紳士ならば」
雲が流れ日光が照らす
その一瞬のまばたきの間に四方を見れどリッチを名乗ったスケルトンは消えていた
（……白昼夢か？）
リッチ。
死者の蘇生を繰り返し果ては、自分さえもよみがえらせてしまった
伝説の暗黒魔導士と同じ名前だった
足元に煙草は転がっていない

□□■■

地下二階から驚異的な速さで、魔物を駆逐しながら進んでいたのは
殺人鬼とシスターのでこぼこパーティーだった
最後の蝙蝠型の魔物を一閃
一撃で葬り、刀を鞘に納めた
斬識はシスターの方を向き聞いた

「弾丸はあとどのくらいですか？」
地下二階からここまで、多くの魔物を戦った
その際にシスター――――クラリカは随分と弾丸を放っていた気がする
自分は刀が主体の戦闘スタイルだからいいとして
弾丸がなくなれば、彼女は戦えない
この先のことを考えるとやはり、温存しておきたいところだ
「そうっすね、節約すればあと３０匹くらいは相手をできそうっすけど」
余裕ある
しかし、モンスターが現れる頻度が増えている今、やはり、節約できるならするべきだろう
「それにしても、不思議な屋敷ですよね。地下にこんなに魔物が現れるなんて」
「そういえば、斬識さんって、魔物とか・・・・・第三世界のことを知ったの本当に最近なんすか？」
「ええ、まあ」
いや、ホントにこんな世界が現存しているとは思わなんだったが、
一見は百聞にしかずというか晴天の霹靂というか
「本当にですか？」
「話が見えませんけど」「そうだとしたらおかしいんすよね。いや、偶然と言えばそれまでなんすけど、偶然というにはあまりに的確過ぎるんすよ。あまりに――――必然過ぎます」
「だから、何を」

「じゃあ聞きますけど二階から来て、三階まで、この短い間、魔物と戦ってきましたけど、……まあ数こそ知れていますが、どうしてですか？どうしてそんなピンポイントで“初めて見た”魔物の“急所”ばかりを攻撃してるんすか？」
「……」
思いもよらないことで、言葉を失う
「そんなに、的確でしたか？」
「不気味なくらいに」
とは言われても
なんか、ここ弱そうだな～と思ったところを攻撃してるだけなのだが特別何かをしてるわけでもないし
「その様子を見ると、本当に偶々見たいっすね」
途端興味を失ったようにクラリカは先に歩き出す。
案外扱いがひどい気がするのは気のせいか？

そして道を右に曲がろうとしたとき

「ああ、ちょっと待って」
「なんすか？これ以上離されるわけにはいかないっすよ」
「そうじゃなくてですね。鈴蘭に仕掛けたこの発信器が示すには、そこの左にある扉を通っていったみたいなんですよね」

左てを見ると確かに少し古い感じの扉がある。
しかし、なにやら嫌な予感のするそんな扉だった

「パット見、トラップは無さそうですけど……クラリカさん開けてみてください」
「なんであたしっすか！？斬識さんが開ければいいじゃないっすか！」
クラリカが叫ぶと

「いや、ほらここはかっこよく二挺拳銃のクラリカさんが壁をぶち破りながら入る姿が見たくて
大丈夫ですよ。安全ですって」「そんな、漫画みたいなことしないっすよ！！安全なら斬識さんが石川十三代目後衛門の如くスパッと」
「嫌ですよ！そんな危険なこと！！」

そうして5分口論が続きクラリカの方から提案した

「斬識さん、ここで言い合っていても、埒があきません。ここは一つじゃんけんはどうでしょう？」
「ジャンケン？グーチョキパーのあれですか？」
「他に何があるか知らないっすけどそれです。つまりそういうことっす。口論をこれ以上続けてもしょうがないでしょう？なら“運”で決めるのも悪くない」

ジャンケンは運で決まると思っている人が多いがそれは大いに間違いだ
人間には癖というものがある
最初に必ずグーを出す人間
チョキを出す時は必ず手首を振ってしまう人間
グー、チョキ、パーの順に出してしまう人間
さまざまな人がいる
癖さえつかめれば必ず勝つことは可能なのだ
他にも相手の出す手を驚異的な動体視力と反射神経で後だしに近い方法で勝つものもいる

「いいでしょう。確かに、どっちが勝っても“公平”ですから、文句はありませんよね」

斬識の動体視力そしてスピードを持ってすれば、どうやったってジ

ャンケンで負けるわけがない。例え相手がどんな小細工をしようと、だ。
クラリカと斬識は扉の前に立つ
「準備はいいっすか？どちらが扉を“くぐる”ことになっても恨みっこなしっすよ」
「ＯＫ。そっちこそ負けて半べそかかないように」
薄暗闇の中二人は構える
「「ジャンケンッ」」
瞬間二人は振りかぶる、斬識は当然、クラリカの手を凝視しギリギリまで引き付ける作業を行う
これは・・・・・グーだ！
判断した斬識は手を瞬間的にパーに変化させる
そしてクラリカは斬識の思惑通りグーのままその手は二人の間にのびてくる
伸びて、さらに伸びて
伸びて？
「へブラッ！？」
斬識の顔面に直撃した
斬識は扉ごと向こう側へと吹っ飛んでいった
パンチのあたる直前に斥も発動していたのでかなりの勢いだ
「斬識さーん、大丈夫っすかぁ！？」
破壊された扉の向こうからクラリカの呑気そうな声が響く
見事に脳ミソをゆるされ意識が刈り取られる寸前だった斬識はゆっ

くりと床に手をつけ体を起こした

デロ

（……デロ？）

床に手をつけると妙な感触がする

恐る恐る斬識は自分の下もとい周りを見渡す

ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ

るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷ
るぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる
ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる

と体育館ほどの大きさの広場に辺り一面にスライムが犇めいていた

「っぎゃあああああああああ！！！！」

叫ぶのもつかの間、直ぐ様、《砕牙》を抜き奮闘するがあまりの多さに斬識は力尽きた

後日、その強さはランディルの比ではなかったと斬識が証言したのはまた別の話

裏切り者（後書き）

うぇい
遅くなったったい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8369q/

零崎斬識の人間崇拝

2011年12月20日01時55分発行